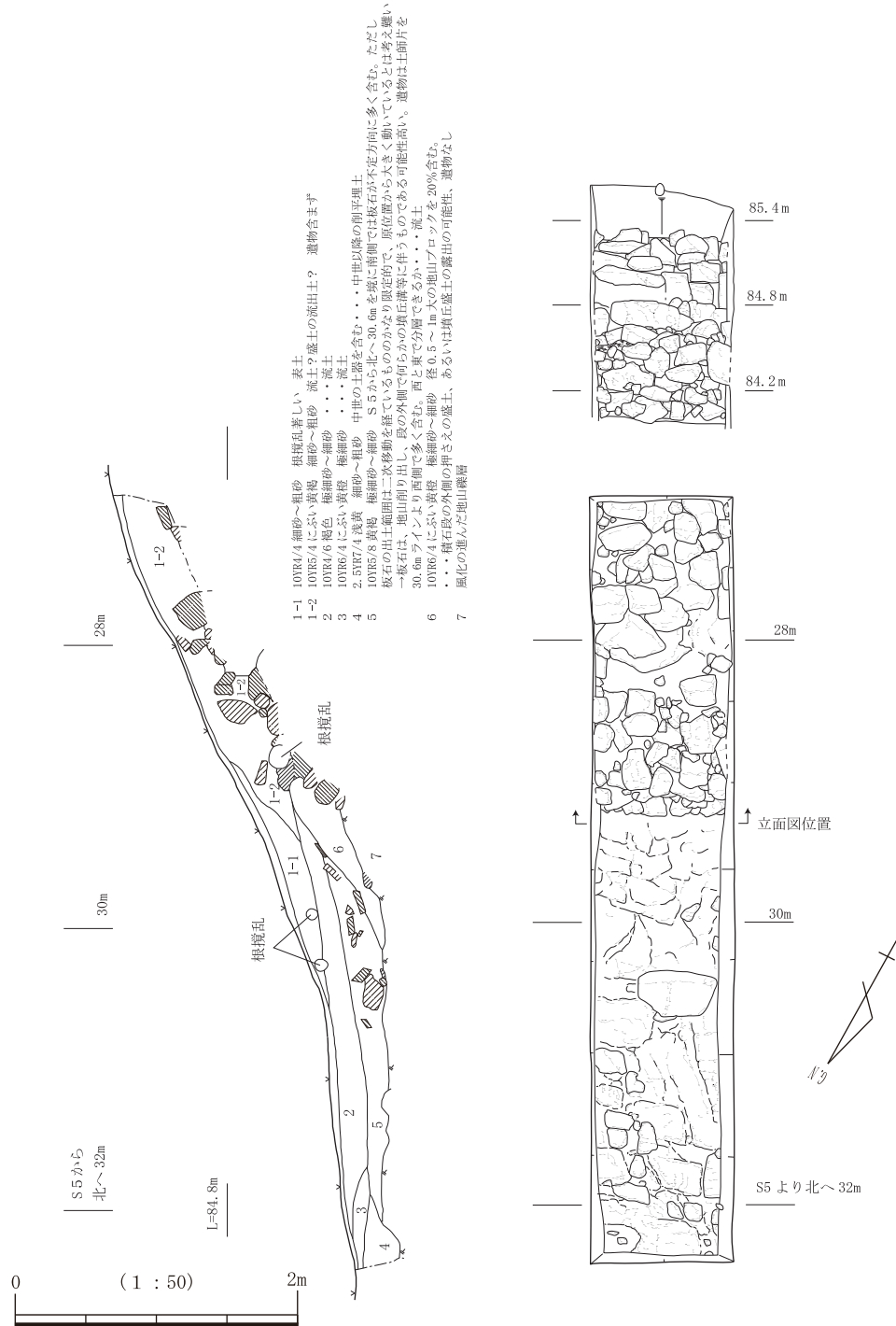


第6節 船岡山2号墳について

1・2次調査で、北墳丘と中央墳丘が別個の古墳であり、中央～南墳丘が前方後円墳の可能性があると推測していたが、北墳丘の規模・墳形については確認できていなかった。このため、3次調査において、北墳丘の南北端を確認するために、6・7トレンチを設定した。その後、7トレンチについては、6次調査で再掘削を行った。トレンチごとの調査成果を順に報告し、小結で2号墳の墳形・墳丘規模に関する調査所見をまとめる。ただし、結論から先に述べると、今回の調査では2号墳の墳形・規模を明らかにすることはできなかった。これは単純にトレンチ数が少ない点にも起因するが、調査の進捗の中で、1号墳の墳丘構造が非常に特異であることが分かり、1号墳の詳細



調査に労力を集中投下するという調査方針を定めたためでもある。古墳群としてみた場合、2号墳の規模・墳形・築造時期は非常に重要な問題をはらんでいるが、今後の調査課題として積み残している点を明記しておきたい。

## 6 トレンチの調査

6 トレンチは、2号墳の北側墳端を確認するため、北墳丘の墳頂部から北側平坦面に向けて設定したトレンチである。S 7から北へ5～10.5 m、仮主軸を東辺とし、西へ1 mの範囲で設定した。

### <堆積状況>

表土・上層の流入土（1～3層）を除去したところ、トレンチ南側では地山起源の角礫と比較的大きな砂岩円礫が集中する状況を確認した。径20 cm以下程度の角礫が比較的密に集中するが、明確な面や配石を形成する状況は確認できず、空隙は少ないものの乱雑に積み上げられた、という印象である。また、84.3 mを境に、より上部の石材は風化が進行していないものが多く、より下部の石材には風化が進行したものが多く。自然環境下での上下関係であれば、より上位の礫に風化が進行しやすいものと考えられるが、ここでは逆転していることから、二次的に移動したものと考えられる。ここでは、古墳の墳丘構築に際して二次的に積み上げられた可能性を想定しておきたい。また、S 5から北へ29 m地点を境に、地山礫の集積が段状に屈曲して下がり、地山である岩盤面に続くことが確認できた。この地点が明確な傾斜変換点として理解できる。このため、乱雑な積み方ではあるものの、これを配石と捉え、以下の報告を行う。この傾斜変換点の北側では地山直上に土器や板石などの二次的な混雑物の無い、締まりの強い層を検出した（図3-30、6層）。調査中には、配石の前面を被覆して押さえ、倒壊を防ぐ用途で人為的に施工された可能性があるかと評価していた。一方、調査の進捗に伴い、墳丘盛土の理解が進んだことから、6層の土質は他の調査地点で検出した盛土層と類似していることが明らかとなったため、墳丘築造に伴う盛土の一部である可能性も想定できる。また、6層の上層からは多量の安山岩板石が出土している。垂直に積み上がるような状況は確認できず、石材は検出時にランダムに傾斜していることから、1号墳で確認したような墳端に伴う安山岩板石の垂直壁そのものであるとは言いがたい。ただ、特にS 5から北へ29.5～30.5 mの範囲、すなわち墳丘上部に近い地点で多量に検出したことから、墳丘側のさほど遠くない地点から転落してきた可能性が考えられる。なお、5層中からは中世の土器を含む遺物が比較的まとまって検出されているが、上記のS 5から北へ30.5 m付近を境に北側で遺物の検出量が際立って多く、5層が分層できる可能性はある。4層についてはトレンチ北端で地山面を緩やかに掘り窪めたように見える堆積層である。確認位置から、当初2号墳の構築に際した丘陵の溝状の切断に伴う落ち込みの可能性も考えたが、層序を確認すると前述の墳丘構築後の堆積層である5層を切り込んでいることから、墳丘の完成後、ある程度の崩落が進んでから削平された痕跡であると考えられる。なお、4層中からは中世の土師器片が出土しており、こうした削平が中世までにはなされていたものと考えられる。

以上をまとめると、比較的風化が進行した地山面と、配石とが形成する傾斜変換点が2号墳の形状と構造を考える上での一つの定点として捉えうる。た



写真3-94 配石前面の安山岩転石状況（3次）

だし、中世段階の削平が大規模であるために、配石が本来の墳端構造なのか、あるいは削平された墳丘内部の状況が露出しているのか、確定しがたい。これはすなわち6層の評価に直結する問題であるが、16トレンチで確認した、配石の基盤となる盛土は基本的には地形に沿った傾斜を見せながらも水平指向であるのに対し、6層はより傾斜がきつくなっている。墳丘の構築に当たって積石の前面に傾斜をつけて盛り上げた盛土であるとする、1号墳では確認していないが、墳丘の積石外周を保護するための押さえの盛土といった性格も考えうるだろう。一方、5層の堆積に先行して、6層の一部が削り取られたことによって6層上面の傾斜が形成されたと仮定すると、6層上面に多量に散布している安山岩板石が構成していた墳端構造の存在が想起される。いずれにせよ、墳端の構造は、1号墳でも地点により多様な様相を呈することから、局所的な調査成果のみで確定することはできない。



写真3-95 6トレンチ配石(3次)

#### <墳端の構造>

ここでは確認した配石の構築方法について確認しておきたい。地山礫の塊石を積み上げた段構造になっているが、垂直基調ではなく、墳丘内側に20～25°程度、持たせかかるように構築される。石材同士はあまり整然と接点を持ち積み上げられた状況は見えず、特に最上部付近では石材が傾斜して前方へ転落しそうな状況である。最下段の1段のみは、前面に石材の広面を向けた用材が確認できる石材もあるが、これも全石材に貫徹されるわけではない。段中に安山岩板石、砂岩円礫は基本的に皆無である。総体として、非常にラフな地山礫の積み上げであり、前面下部の盛土で抑えられて安定性を保っているようにも見受けられる。

6トレンチの調査結果からは、1号墳で確認した配石とは異なる構造の配石が確認されたものの、削平の可能性もあることから、墳端の確定は困難であることを確認した。(高上)

#### 7トレンチの調査

7トレンチは、北墳丘と中央墳丘の連続性を検証するとともに、北墳丘の南側墳端の位置を確認し、2号墳の墳形と規模を明らかにすることを目的に設定したトレンチである。現地地形を見ると、北墳丘の裾にあたる調査区北端の地表高は85.3mで、しばらく平坦に続き、南1.5m～3mでごく緩やかに下り、それより南では概ね地表高84.9～84.8mとほぼ平坦に中央墳丘北裾まで続く。東西方向でも後述する拡張区両端で各々84.75m、84.7mと傾斜は乏しい。つまり本調査区を設定した北墳丘と中央墳丘の間15mほどは地表面の起伏が極めて乏しく、この点がかつて双方中円墳の可能性が想定された要因であると考えられる。

#### <トレンチ設定>

3次調査において、S10から北へ1.5m～北11.5mまでの南北長10mで、仮主軸ラインを西辺とする幅1mの調査区を設定した。北墳丘上にある石製祠前面の石組みを調査区の北端とする。また、南端は1トレンチの北端に接続するよう設定している。掘削は北側から順に拡張を繰り返して行った。3次調査では1トレンチに接するまで掘削を広げられず、両調査区間の余白2.4

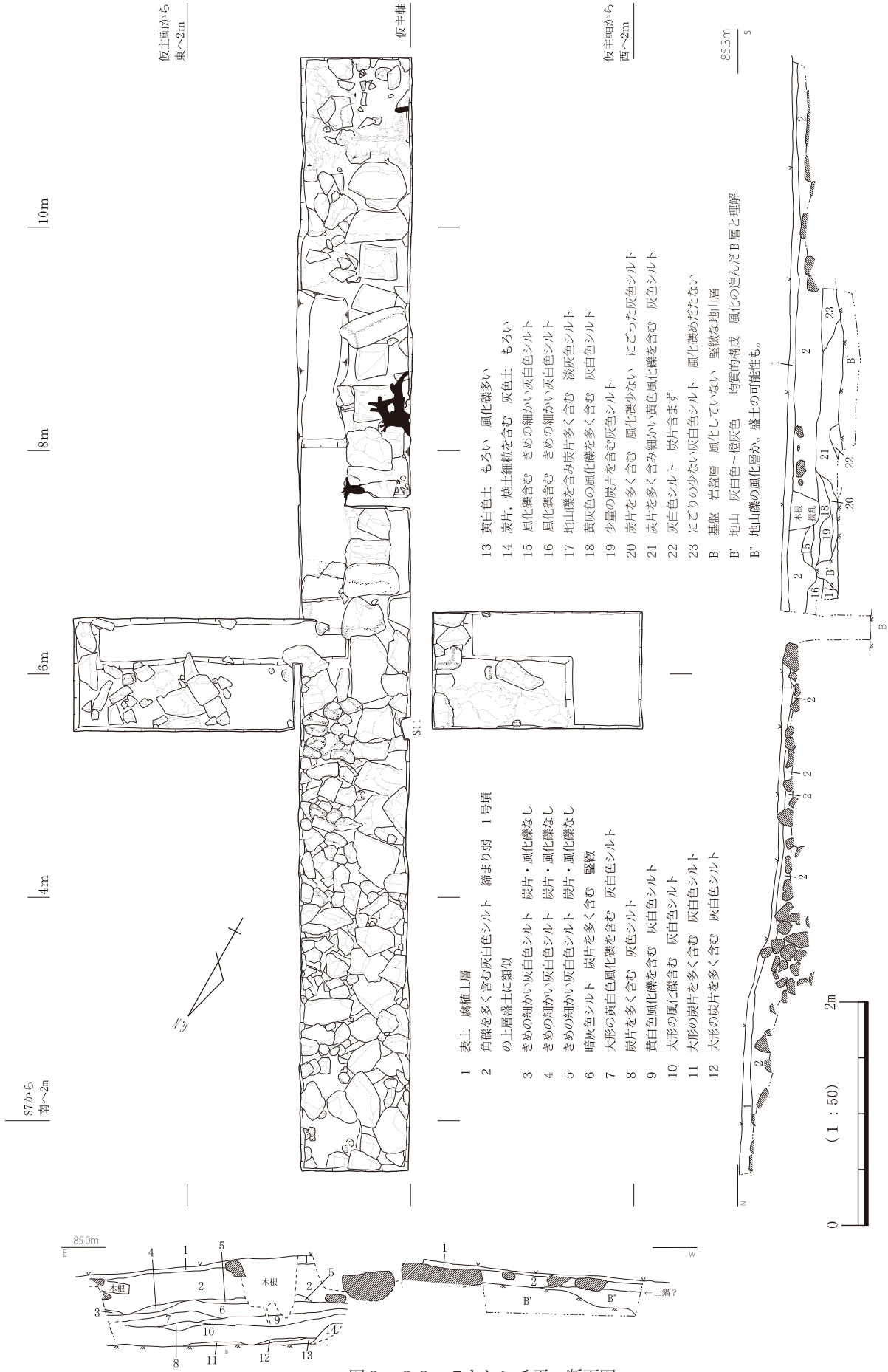


図3-32 7トレンチ平・断面図

mについてはあらためて6次調査で7トレンチ南拡張区として調査した。以下の報告では、7トレンチ南拡張区を区分して記述を行う。また表土直下で検出した礫群の広がり追求するため調査途中でS10から北へ6.5m～7.5m（7トレンチ南端から5m）で幅1mの東西方向の拡張区を設けた。共に東西2mの規模である。この結果、7トレンチは平面十字形の調査区となった。

＜調査の進捗＞

調査はまず南北方向に設定したトレンチの掘削から開始した。結果として、北側墳丘の南側墳端に相当する構造は確認できなかったことから、東西方向にトレンチを拡張した。結果、ここでも墳端に関連する構造は確認できなかった。墳丘上面は削平などにより既に失われている可能性が考えられたことから、次善の策として、盛土部分に断割り調査を行い、断面観察から墳端の位置に迫ることを考えた。この断割り調査の結果、これまで地山と考えていた固く締まった白色系シルトが、地山そのものではなく、地山起源の盛土である可能性が高まった。これは、断面観察の結果、比較的色調・土質が斑に混交されたように見えたことと、微細な破片であるが土師質の土器片・石鏃などの遺物が含まれていたためである。この評価が調査担当者間で確信を持って調査に反映できるようになったのは、6次調査で前方部背面の盛土を確認するに至ってである。

＜礫敷と盛土＞

さて7トレンチ南北調査区のほぼ全面において表土直下で礫群を検出した。長辺50cmに達する大型礫から拳大前後の小型礫までを交え、地山角礫と共に大小の砂岩円礫が比較的多くみられた点が注意された。礫群の上面は地山の緩やかな起伏に応じており、目立った凹凸はない。北端附近約1.5mの範囲では拳大以下の小円礫が礫群上面に多く見られ、その下部ではやや風化の進んだ大型角礫が幾重にも折り重なるように観察された。北墳丘北面6トレンチの礫群に通じる様相である。また南端1mほどはやや礫間の空隙が目立った。その間の南北約7.5mの部分では礫の配列にある種の規則性が認めら



写真3-96 7トレンチ完掘状況（3次）



写真3-97 7トレンチ南拡張区完掘状況（6次）



写真3-98 7トレンチ盛土検出（3次）



写真3-99 7トレンチ 礫敷き下土器出土状況（3次）

れた。7トレンチ南北軸にちょうど一致するように調査区の西半分では長辺50cm前後の大型礫が一行に敷き並べられ、東半では拳大～小児頭大の小振りな礫を敷き詰めたようにみえた。これらは北端部のように重なり合うことは少なく、一面に敷並べた状態であった。礫の大小を問わず地山角礫と砂岩円礫が混在し、また東半部では所により礫が抜け落ちたような空隙も認められ、これらの配列は必ずしも整然としたものではなかったが、明らかに意図的な配置が推測された。礫群の上面やその間に土器類は一切認められなかった。

この礫群の性格追求が課題となり、まずは広がりを目指すために東西方向の拡張区を設けた。西拡張区では東寄り1.5m付近まで大型礫の広がりが確認できたが、積極的に意図的な配列を想定する状況にはなく、それより西側では礫そのものが見られなかった。東拡張区でも表土直下に一応は礫群が観察されたが、それらはいっそう疎らでやはり規則的な配置を想定することは困難であった。調査期間の関係から3次調査では礫群の広がりを追求するための調査区の拡張は断念した。一方、礫の希薄な箇所を選んで断割りを行ない、礫群下部の状況を追跡してその敷設時期さらには性格を追求することとした。

大型礫はなるべく現状で保存するため、東西拡張区で南壁に沿って幅40cmほどの断割りをおこなった。その後、西各調査区の西端では調査区幅まで断割りを広げた。また南北調査区では東半部でとくに礫群が希薄な箇所を選び、拡張区との交点附近からその南2.5mまで東壁に沿った断割り部を設けた。

まず西拡張区で大型礫が風化礫を多く交える淡黄灰色土層上面（標高84.7m）に載ることを確認した。この層は西に向かって急激に厚さを減じ、その上部に締まりのない淡灰褐色土が堆積し、その末端は礫群下にわずかに続く。なお淡黄灰色土上面ないし淡灰色土層の末端部分で中世の土鍋片を検出した。検出状況から、明らかに礫群の下面に位置するものであった。今のところ礫群の敷設時期を推測する唯一の手がかりであるが、これによってこの礫群が中世以降に敷設されたものである可能性が高まった。なおこの淡黄灰色土は20～25cmの厚さがあり、その下部、標高84.4mで多少風化しているが堅緻な灰白色土に達した。地山面と考えられるこの面は、西拡張区ではほとんど水平に広がる。

東拡張区は前述の通り、面的な礫群の広がりが確認できなかったが、南北調査区の礫敷下面に相当するレベル（84.5m）で硬く締まった肌理の細かい灰白色土を確認した。以下標高およそ40cmの厚さで同種の白色系の層群が連続し、標高84.1mでほぼ水平に堅緻な地山岩盤層が広がる。

この一連の白色系土層は子細に観察すると基本的構成物の土質は異ならないが風化礫や炭細片の混入度合いによって区別される層厚5～10cm内外の薄層数枚の連続からなる。その一部には炭細片を多く含み灰色を呈するものもある。全体として硬く締まり、土質と堆積状態は1号墳各所で確認した墳丘盛土に通じる。

南北調査区の断割り部でも、礫敷面以下で同種の土層を確認した。特に南半部では堆積の単位がやや大まかではあったが、風化礫や炭片の混入状態や堅緻さを含めて東拡張区の白色系土層と同質である。その下部にはやはりより堅緻な地山面がほぼ水平に広がる。ただし地山面の標高は84.4mで西拡張区のそれと異ならないが、両者共に東拡張区の検出地山面よりおよそ30cm高くなる。なお東拡張区の白色系土層下部からサヌカイト製石鏃片1を検出した。これが唯一の共伴遺物で、他の断割り部を含めてこの一連の盛土層中からは、埴輪片など古墳構築時以降の遺物は

確認していない。

以上の確認内容とその評価をあらためてまとめておく。7トレンチのほぼ全域において表土直下に礫敷面を確認した。検出状況から、人為的な敷設と判断できる。その敷設時期は中世を上限とする可能性が高く、1・2号墳に伴う施設ではない。

ただし各断割り部で確認した礫敷下で地山面までの間20～40cmの厚さをもつ淡色系土層群は1号墳各所で確認した墳丘盛土に酷似する。土質や夾雑物（風化礫、炭片）は1号墳盛土に共通し、埴輪片等の混入はない。またこの淡色系土層群下の地山面はそれぞれの断ち割箇所において概ね水平に広がり、かつ風化の進行した表層部分を切除した様に観察された。この点も1号墳盛土検出地点の地山面の様態に通じる。

以上からこの淡色系土層群は古墳盛土の可能性が高い、つまりその検出範囲は古墳墳丘の一部と推測しておきたい。その場合、1号墳と2号墳のいずれに帰属するのかが重大であるが、後述する7トレンチ南拡張区においてこの層群が連続しないことを確認している。また1トレンチでは1号墳盛土は後円部北面の配石の北1.4mまでにしか及ばないことを確認している。つまり1号墳後円部との間には少なくとも南北6.7m墳丘盛土層が欠落した部分がある。そしてこの部分の地山上面にはやや脆い風化層がそのまま残り、盛土下部の様相とは明らかに異なっている。したがって1号墳後円部から北に長く墳丘盛土が延びると推測することはできず、双方中円形墳説を棄却することになる。

墳端構造は明らかではないものの、盛土の分布範囲を根拠に1号墳後円部からの非連続を前提とすれば、7トレンチで検出した盛土は、2号墳墳丘の一部と捉えざるをえない。そうすると、その広がりや確認位置から2号墳も前方後円形を呈すると判断する可能性が浮上することになる。しかし7トレンチ表土直下礫敷面の保全を優先し7トレンチの断割り調査を限定したため、2号墳墳丘と礫敷直下淡色系土層群の関係を直接的に判断する材料を得ていない。甚だ曖昧ではあるが、ここでは上記のとおり2号墳が前方後円形を呈する可能性を提示し、同時に将来的な調査でこの点の検証が必要であることを付記するにとどめる。

#### <7トレンチ南拡張区の調査>

3次調査で課題として残った1トレンチ・7トレンチ間の未確認部分を追求する目的で設定した。両調査区の間は3mであるが、7トレンチ南端を再掘削すると共に、1トレンチの北端を併走させることとした。その結果7トレンチ南区南北長は5.2mとなった。調査地点の地表高は84.9mから84.85mでごくわずかに北に下がりつつもほぼ平坦にのびる。表土直下には締まりのない黄褐色ないし暗褐色土がひろがり、それら全体の層厚は20～50cmとなる。ここからは少量の埴輪片が出土した。北半部ではこれらの下面近くに拳大～小児頭大の砂岩円礫や地山風化礫が点在した。1トレンチ北面配石附近あるいは7トレンチ断割り部で観察した堅緻な盛土層は7トレンチ南拡張区全域で確認できなかった。また黄褐色ないし暗褐色土層下部の地山面は南半部では緩やかに起伏しながら概ね84.5m～84.6mで続き、北半部では84.3～84.4mまで浅く凹む。地山上面は全域で細かく亀裂が走りやや脆い風化層であった。地山面より上位は締まりのない土砂が堆積し、7トレンチで検出した風化礫を多く交える堅緻な灰白色土／暗灰色土の重なりは見られなかった。（大久保・高上）

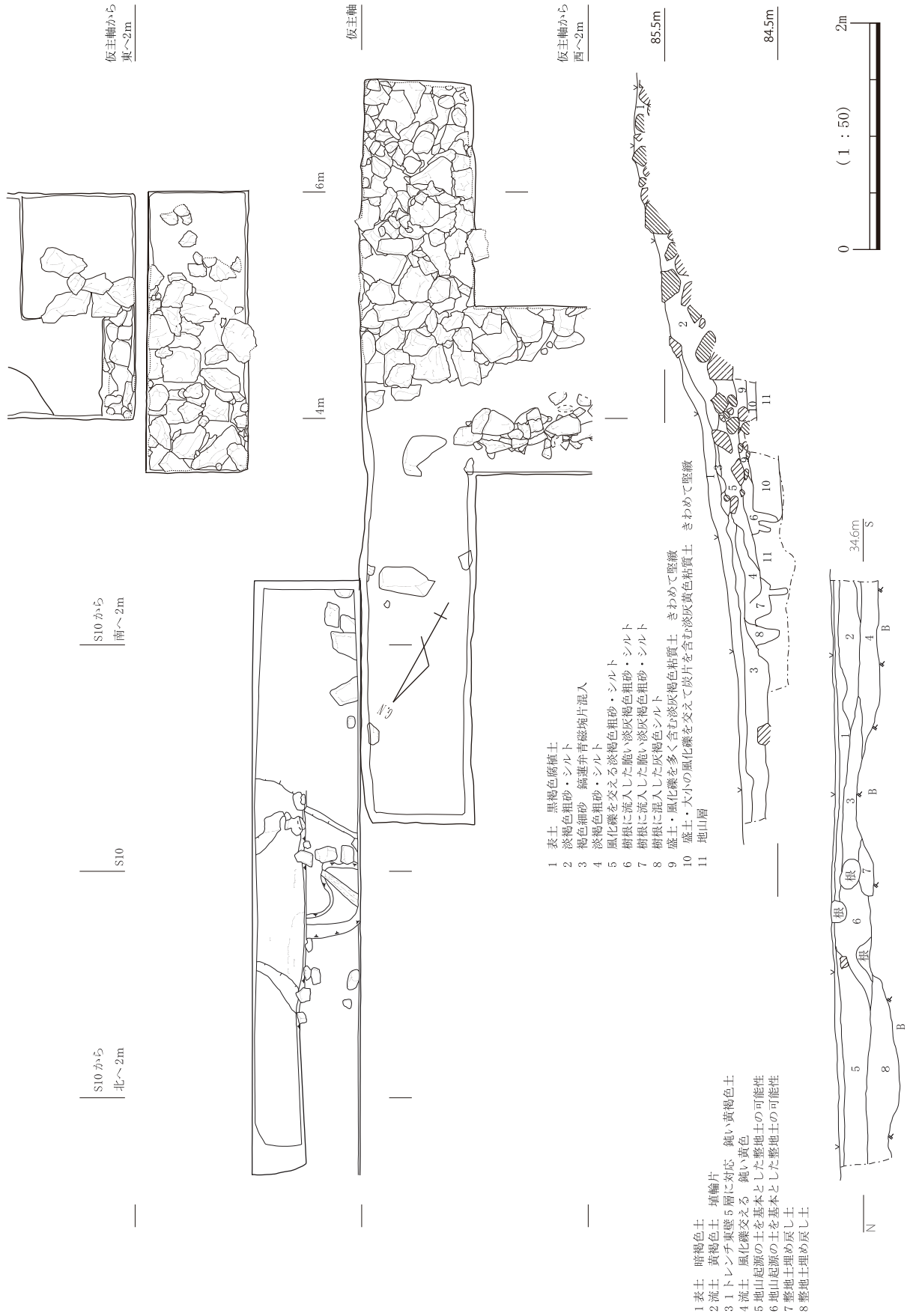


図3-33 7トレンチ南拡張区平断面図及び1・18トレンチとの位置



### <2号墳の小結>

本節の冒頭で述べたとおり、今回の調査で2号墳の墳形・墳丘規模、帰属時期について、いずれも確定的な事実を確認することはできなかった。6・7トレンチで確認できた断片的な情報を整理すると以下のとおりである。

まず墳形及び墳丘規模について、6トレンチで確認した配石から、人工的な構築物であり、その北端がS 5北29m地点で確認できた。これは墳形を考える上で一つの定点となろう。ただし、その前面の盛土層の存在から、失われた墳端部の存在を推測すると、1号墳の墳端はさらに1m程度は北側に広がる可能性がある。一方、墳丘南側の7トレンチでは、明確な墳端を確認することはできなかった。一方、盛土の連続から、少なくともS 10から北へ1.5m地点までは2号墳の墳端が延びること、1号墳とは明確に縁が切れ、別構造の墳丘であることが判明した。確定的な所見としてはこれ以上の情報は無いが、2号墳の規模が南北方向で20m程度であることがわかる。前方後円墳の可能性も想定したが、問題は、全く今後の調査に持ち越しである。

帰属時期に関しても、明確に2号墳に伴うと判断できる遺物は皆無である。ただし、1号墳の後円部上には比較的少量の埴輪が樹立されていたと考えられるが、仮に2号墳が1号墳に後出とした場合、盛土の採取場所は地山表層の削平に大きく掘ると考えられるため、盛土に用いる土砂の集積に際して1号墳起源の埴輪片が多少なりとも混和されてしかるべきであろう。ネガティブな根拠ではあるが、こうした混入遺物の不在も、2号墳と1号墳の構築順序を検討する上での論拠となろう。すなわち、2号墳と1号墳の構築について、少なくとも2号墳が1号墳に大きく後出する可能性は低いものと考えられる。こうした時期差の問題は、浅野小学校所在石棺の帰属先を検討する上でも重要な視点である。つまり、2号墳の築造時期が1号墳よりも大きく降り、浅野小学校石棺の本来の帰属先であった可能性は低いということを示す。また、6トレンチで検出した石垣状の配石は、比較的立体的であり、17トレンチ下方で確認された石垣状の配石と類似した構造を示す。論拠としては弱いですが、こうした構造上の類似点からみても、1号墳と2号墳は大きく時期の離れたものではないと考えておきたい。(高上)

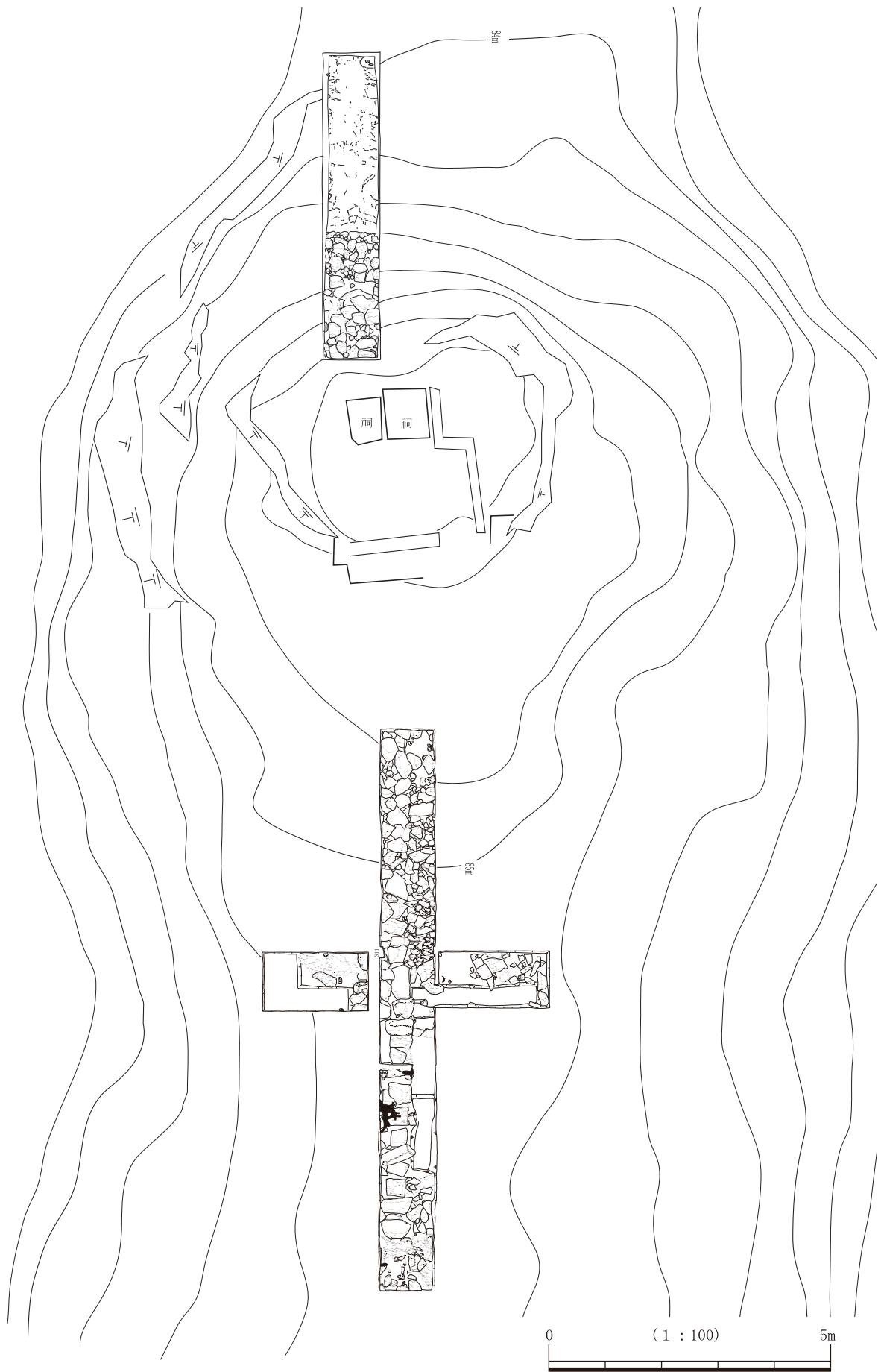


図3-34 2号墳の調査成果

## 第7節 船岡山古墳群の構成について

ここまで確認してきたとおり、船岡山古墳群は前方後円墳（1号墳）と墳形・規模ともに未確定の2号墳の2基からなる古墳群であることが分かる。船岡山の山頂には、北墳丘よりも北側には丘陵上の高まりは存在せず、急傾斜となることから、未確認の古墳が存在する可能性は低い。ただし、南墳丘の南側は、第1章第2節のとおり、近代以降の石切丁場に伴ない丘陵が崖状に大きく削平されていることもあり、南墳丘よりさらに南の尾根線上に別の古墳が存在した可能性は否定しきれない。また、第2章第1節で紹介したが、近世末に船岡山には窯を造る際に破壊された後期古墳が存在したことが分かるが、この記載も山麓ないし山の斜面に関する記事であると考えられることから、山頂部に所在する船岡山古墳群とは分けて考えておきたい。

なお、詳細は遺物編にて報告するが、1号墳は古墳時代前期前半の時期を想定しているが、2号墳からは古墳に伴う明確な遺物が出土しておらず、築造時期は不明である。ただし、前節で触れたとおり、とりあえずは大きな時期差を想定しないのが穏当であると考えている。

さて、2基の古墳の立地関係を再確認すると、2基は同一丘陵上に連続して築かれる。堆積状況からみた構築の先後関係は不明である。盛土の分布範囲から、1号墳後円部北端から2号墳までの距離は、長く見積もっても6.7mよりは長くないだろう。非常に近接した位置関係にあると評価できる。近在する石清尾山古墳群においては、北大塚古墳と北大塚東古墳のように、前方後円墳と方墳が近接して築造される例がある。時期的には船岡山古墳群の方が先行すると考えられるが、こうした群形成のあり方は共通している可能性もある。

南側の石切丁場による崖まで、1号墳の前方部端から1.4m程度しか離れておらず、丘陵上にこの2基以外に、古墳が確認できる余地は残っていない。石切丁場の規模が不詳であるが、船岡山が独立丘陵で、すぐ南側に近世に築かれた舟岡池が迫っており、古墳時代当時には低地であったと考えられることから、未確認の墳丘が、それも前方後円墳が築造されるほどの広い頂部が残っていた可能性は低い。このように、狭小な独立丘陵上を選地していることから、古墳築造当初から同一地点での連続的な古墳築造は無理な地形であったといえる。すなわち、連続して短期間に複数の墳丘を同一丘陵上を選地する意図は、築造当初からなかったものと考えられる。石清尾山古墳群のような広大な丘陵上を選地とは、その後の継続的な築造が可能かという点において、大きく異なった選地であるといえる。（高上）

## 第4章 古墳築造後の改変

### 第1節 はじめに

古墳築造後、自然・人為ともに大きささまざまな契機で墳丘が改変されたと想定できるが、本章では主に今回の調査で明らかになった人為的な削平・改変について取扱う。特に、具体的な痕跡によって明らかになった古墳の削平と、現況の地形観察と堆積状況から見た大規模な墳丘の改変の2点について以下で報告する。

### 第2節 発掘調査で確認した改変の痕跡

墳丘上の各所で、人為的な改変と思われる墳丘の削平が確認された。大規模で範囲がある程度判明する改変を対象に、北から順に改変の具体的な様相を確認していきたい。

7トレンチでは、大型の砂岩円礫・地山礫角礫を直線的に敷設した状況を確認した（図4-1）。南北方向に4m以上にわたって直線的に並べられた礫敷であり、明らかに人為的に配置されたことがうかがえる。また、礫敷直下で、墳丘盛土との間に中世の土師器を検出している。この礫敷きの範囲を確認するため、十字に拡張区を設定したが、東西いずれの拡張区にも連続する構造は追えない。墳丘の削平という点では、一部墳丘盛土の上に載り、天端高さがほぼ揃っていることから、ある程度盛土を削平するなどして石材天端の平坦化を図った可能性は想定できるが、1号墳側で後述する改変に比べて、墳丘を削平する意図は小さく、墳丘上に設置したものであると考えられる。石材の配置状況をより詳細にみると、天端がほぼ水平になるように石材を設置している。また、各石材の天端のレベルは概ね揃っており、緩やかに南に向

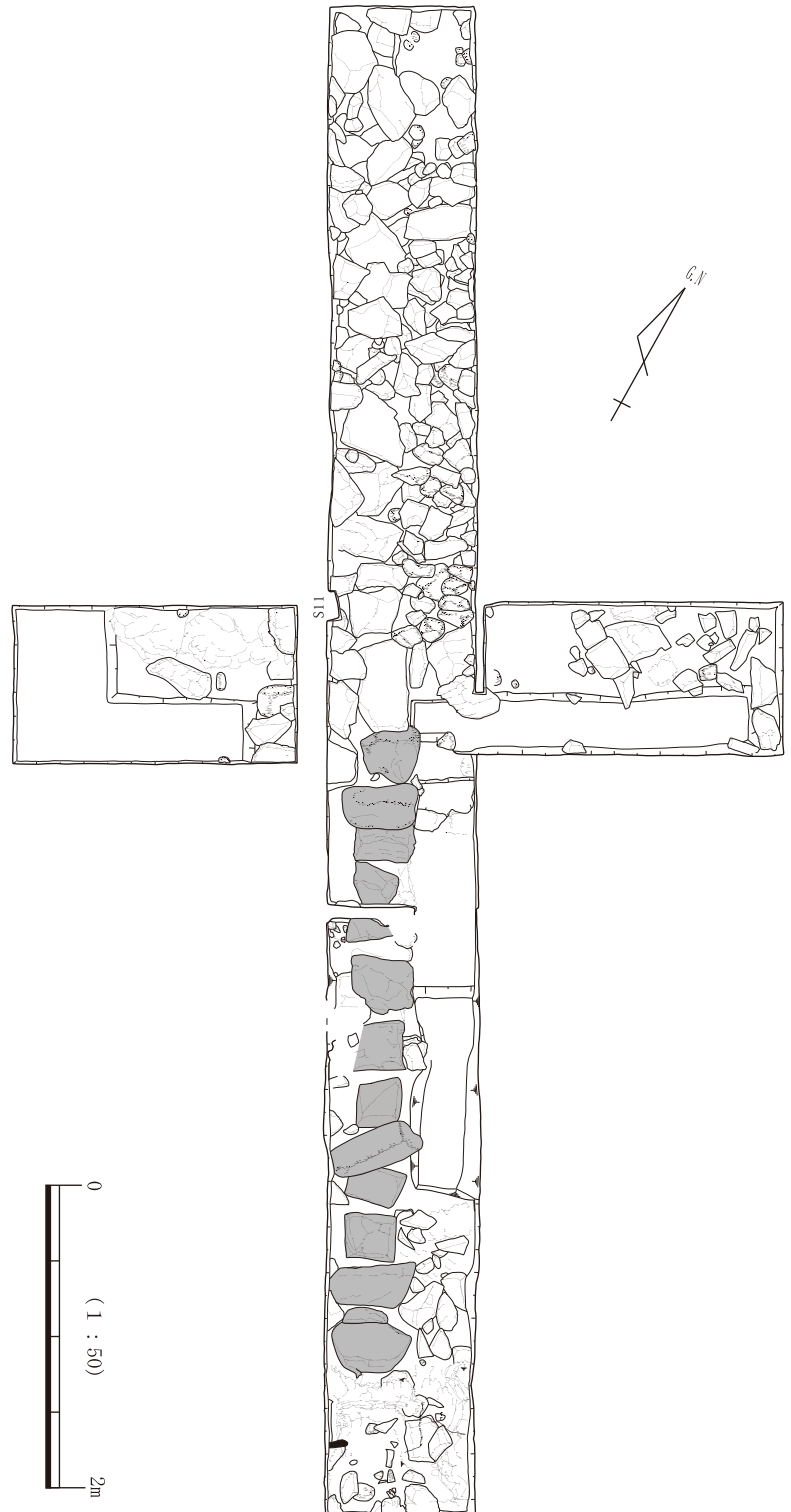


図4-1 7トレンチ 礫敷検出範囲

かって降る。建物基礎などの可能性が考えられるが、平面配置も不明であり、関連する建築部材なども確認できていないことから、その成因が何であるかについては、これ以上検証する術を持たない。直接的な関係は明示しえないが、第1章第2節で報告した、船山神社など、社寺の関係施設である可能性も一応推測しておきたい。

18トレンチでは、上段の配石の残存が期待された調査区であったが、配石及びその背面の積石が削平された状況を確認した(図4-2)。一部で盛土及び積石の基底が残存する状況も確認できたが、ほぼトレンチの全域に渡って積石が削平され、盛土上面が露出した状況であった。削平された盛土の上面は概ね平坦で、標高84.9m程度を測る。削平はさらに調査区外まで広がることから、規模の大きな改変であったことが分かる。1トレンチで確認した積石段との関係から、この削平は高さ90cmに及ぶことが分かり、非常に大量の墳丘が二次的に攪乱されたことが分かる。また、削平後には、地山礫及び盛土起源の埋没土で埋め戻されており、現地供給土で埋没したことが分かる。この被覆土からは遺物が全く確認できなかったことから、改変の時期及び契機は不明である。

17トレンチでも、主に墳丘頂部において、積石が削平された状況を確認できた。墳丘外側に向けて削平深度は浅くなるが、トレンチ西端で0.8mを測る深度まで墳丘が削平され、二次的に移動した墳丘起源の石材と土砂によって埋め戻されていた。石材には地山礫の他に安山岩板石や砂岩円礫も含まれており、くびれ部や埋葬施設の破損材が混入した可能性が想定される。埋土中には埴輪片と共に中世の土師器片が出土しており、遺物の検証による削平時期の前後については今後の課題であるが、16・18トレンチで確認した削平と整合的である。

16トレンチでは、上段の積石段が削平され、芯の盛土が露出する程度まで削平が及び、2㎡以上の平坦面が作り出されていた。平坦面の標高は、およそ84.5mを測る。範囲は仮主軸から西へ3.5～4.5m、S4から南へ4.5～6.5mで、北端はトレンチ外へ延びる。ちょうど上段配石のくびれ部からやや南側の範囲で削平が収まっていた。この削平埋土中からは中世の土師器、鉄釘などと共に底部付近で埴輪片が出土している。残存した範囲の墳丘部分から比較すると、少なくとも30cm以上の深さで墳丘を削平したものと考えられる。削平の契機については不明であるが、平坦面を作り出していること、鉄釘が出土していることから、何らかの建造物を伴うことが推測される。ただし、全調査を通じて概期の瓦は出土しておらず、また、平坦面上には柱穴は確認されていない。

これ以外にも前方部前端の東西両端は流失しており、前方部東側面でも墳端の構造がほぼ全て流出するなど、本来の墳丘形状は各所で大きく損なわれている。ここでは大規模である程度範囲が特定できるものについてのみ特記した。

以上の改変をまとめると、特に後円部上～くびれ部にかけては大規模な削平と、削平後の埋め戻しという行為が確認できる。後円部頂の東側面では、現地表面下0.9m程度までの深度が削平と削平土・礫による埋め戻し行為がなされている。削平の及ぶ範囲は盛土上面までで、攪乱下面は平坦になることから、平坦面までで削平を中止していることがわかる。平坦面上での何らかの行為の跡は認められない。非常に多量の土砂・礫の削平と移動であり、強い意図を持ち行われた行為であると推測される。次節で後述する、山上の平坦化と一連の行為である可能性が高いと考えられる。

また、前方部側では、墳端構造の流失が広範に認められるものの、後円部で確認されたよう

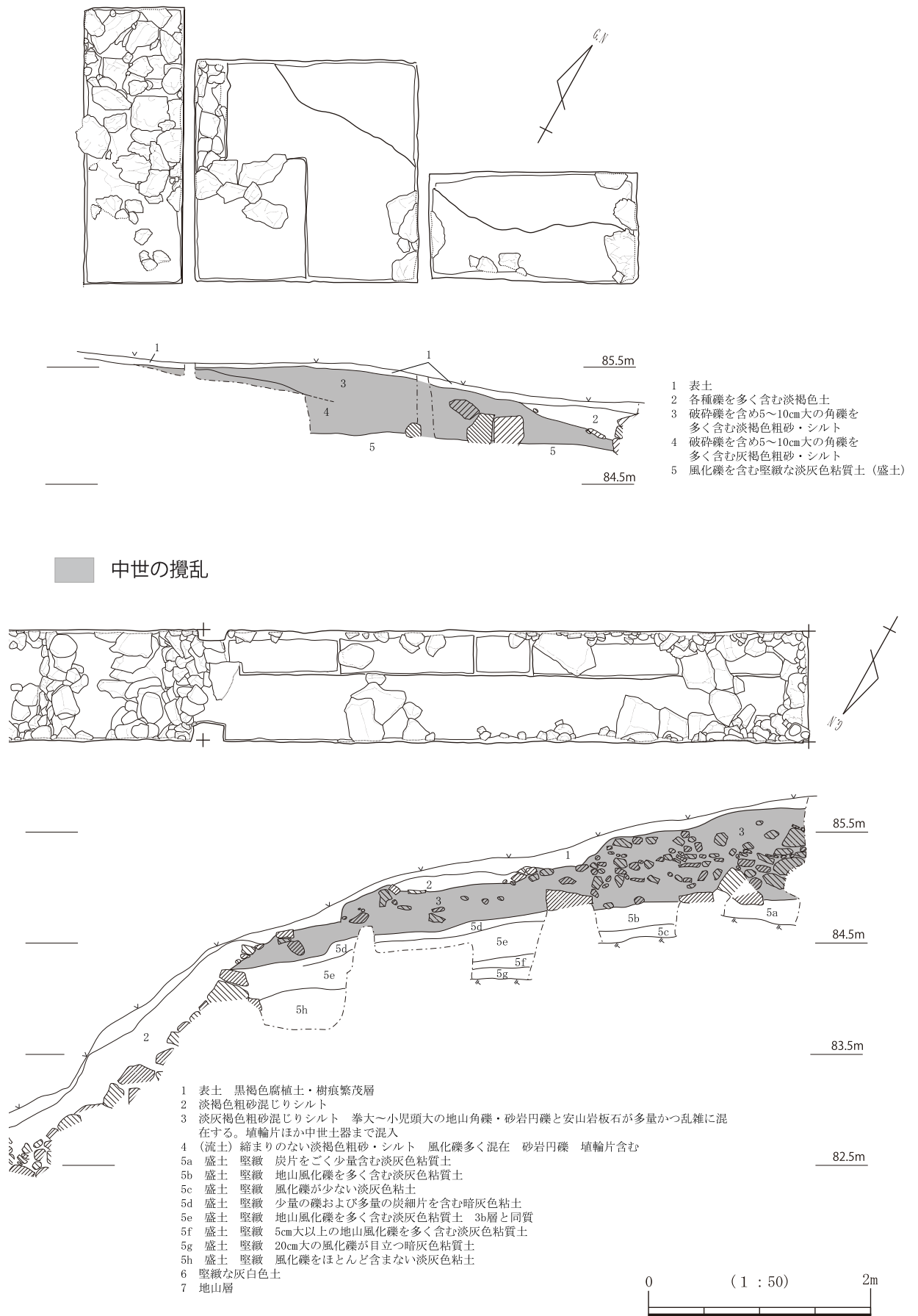


図4-2 18・17トレンチ 中世の攪乱

な削平と再埋没といった行為は認められない。

このように、墳丘の二次的な改変は、部位によって行われた行為の程度が異なりそうである。すなわち、大規模な削平と再埋没を経た後円部と、墳丘の流失は多いものの、二次的な再埋没が確認できないそれ以外の地点である。このことは、後円部では大規模に墳丘が攪拌されている一

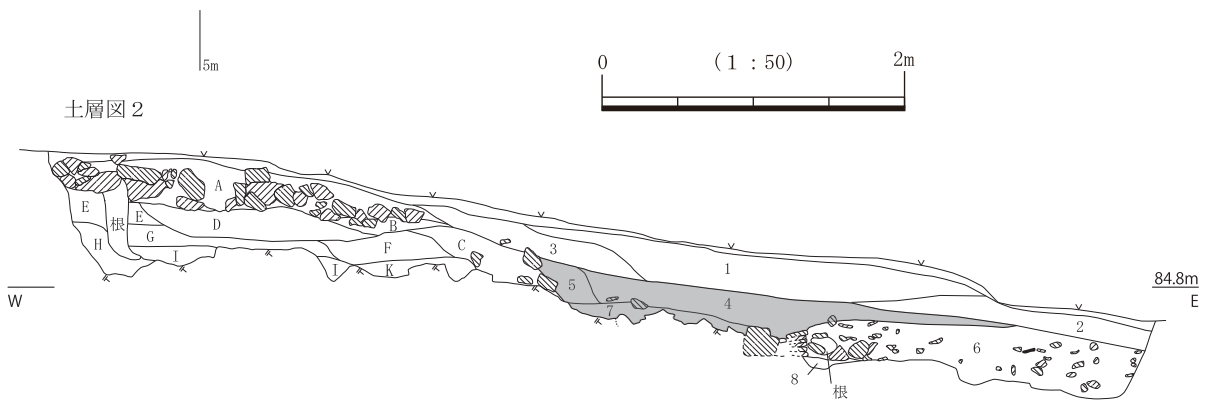
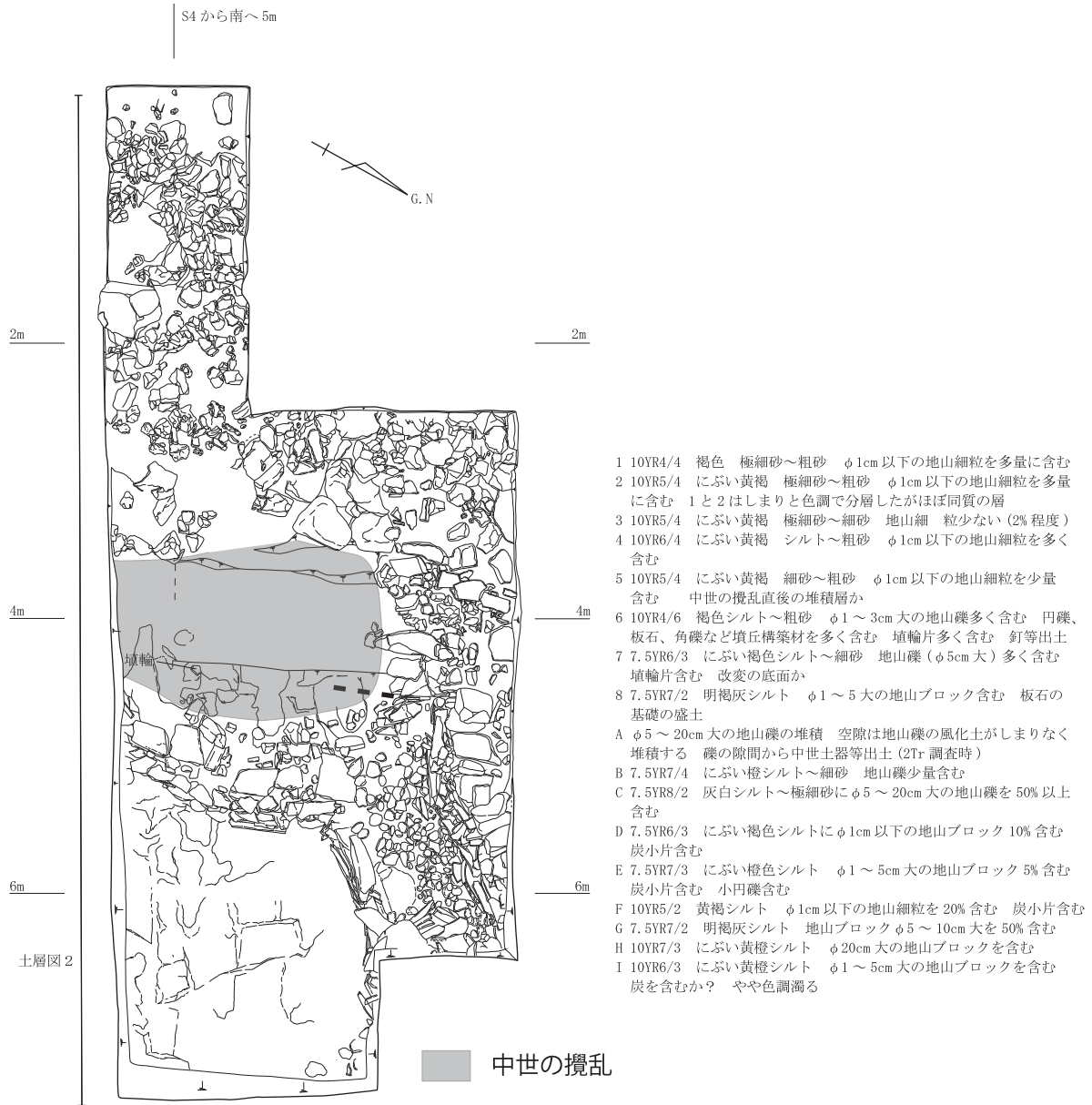


図4-3 16トレンチ 中世の攪乱

方、前方部や2号墳側では削平のみで二次的に流土が供給されなかったことを示す。あるいは、前方部等で削平した土砂を後円部側に供給したのだろうか。このことは、墳丘が現況を呈している背景に、意図的かつ選択的な改変が行われたことの証左となるだろう。すなわち、過去の測量調査でも注目されていた、3箇所の墳丘の高まりがそれぞれ同程度の高さを有しており、前期の前方後円墳で通有の後円部が前方部に比して高い形状を示さない点について、それが二次的な改変によるものであるという理解である。この点については次節で地形観察と関連付けて再述する。

ミクロな視点からみた改変の痕跡は上記のとおりである。つづいて次節で、墳丘測量図の観察によるマクロな視点からみた改変の可能性について報告する。

### 第3節 墳丘の現況からみた削平の可能性

東西くびれ部（9・16トレンチ）では、墳端の積石は現地表面下0.5mと、かなり深い位置に埋没していた。県教委の測量調査時にも指摘されていたことであるが、（香川県教委1980）船岡山1号墳の後円部（中央墳丘）の現況での高さが、前方部と同程度の高さである点に注意が必要である。図4-4は、墳丘測量図を元に仮主軸上の墳丘断面図を作図したものであるが、後円部上面の標高が約86m、前方部も86mとなる。また、2号墳の墳頂部の標高は85.75mを測り、3つの墳丘の標高が概ね等しくなる。当初こうした地形的な状況から、双方中円墳である可能性が想起されたわけであるが、今回の発掘調査で否定された。結果、1基の前方後円墳と墳形不明の古墳1基であることを確認したわけであるが、1号墳の後円部高さは本来現況よりも高くあったものと考えられる。それが現況を呈している原因に、本節で取り扱う後世の改変が関与している可能性について検討しておきたい。

船岡山1号墳は丘陵の頂部に所在し、大量の土砂の自然流入は想定できないことから、9・16トレンチは人為的に多量の土砂を運搬し、埋められたものと考えられる。埋没土の土質を見ると、比較的少量の墳丘構成材である石材を含むこと、盛土あるいは地山起源と考えられる土質の土砂で埋没していることから、土砂の供給源は墳丘の削平により供給されたと考えるのが自然である。部位を特定する根拠に欠けるが、くびれ部から直近で、一段高く築かれていた後円部上部の大規模削平によるものであるとすると、現在の墳丘高が低い点と整合的である。こうした推定が正しいとすると、後円部を削平し、くびれ部を埋めることで、結果的に山頂の凹凸が少なくなり、比較的平坦な面が確保されたことになる。図4-4の墳丘測量図をみても、くびれ部の割りこみが明瞭でなく、比較的なだらかな平坦面が続くことがわかる。前節で報告した後円部北東面の削平後の再埋没についても、山上の平坦部をほぼ同一の標高に整える目的でなされた可能性が考えられる。こうした推測が正しいければ、少なくとも後円部北東面の削平について、削平し平坦面を造り出した契機と、それを埋没させて平坦化させた契機については、全く別の要因が働いていたと想定するほうが自然である。16トレンチでも確認した、墳丘側面付近を抉るように削り取り、段状の平坦面を形成する契機と、それを廃絶して山頂を平坦にする改変の、2段階の改変が行われた可能性が考えられる。改変の契機について本稿ではこれ以上追求することができないが、調査各地点から比較的多くの中世遺物が出土しており、これらの改変に関連した遺物である可能性が考えられる。時期及び遺物の評価については、別冊の遺物編にて改めて検討する。

なお、山上に現存する祠については、山の麓にあったものを現代になって現位置に移動したとのことであるため、直接的に上記の改変に伴うものとは考えがたい。（高上）



第3節 墳丘の現況からみた削平の可能性

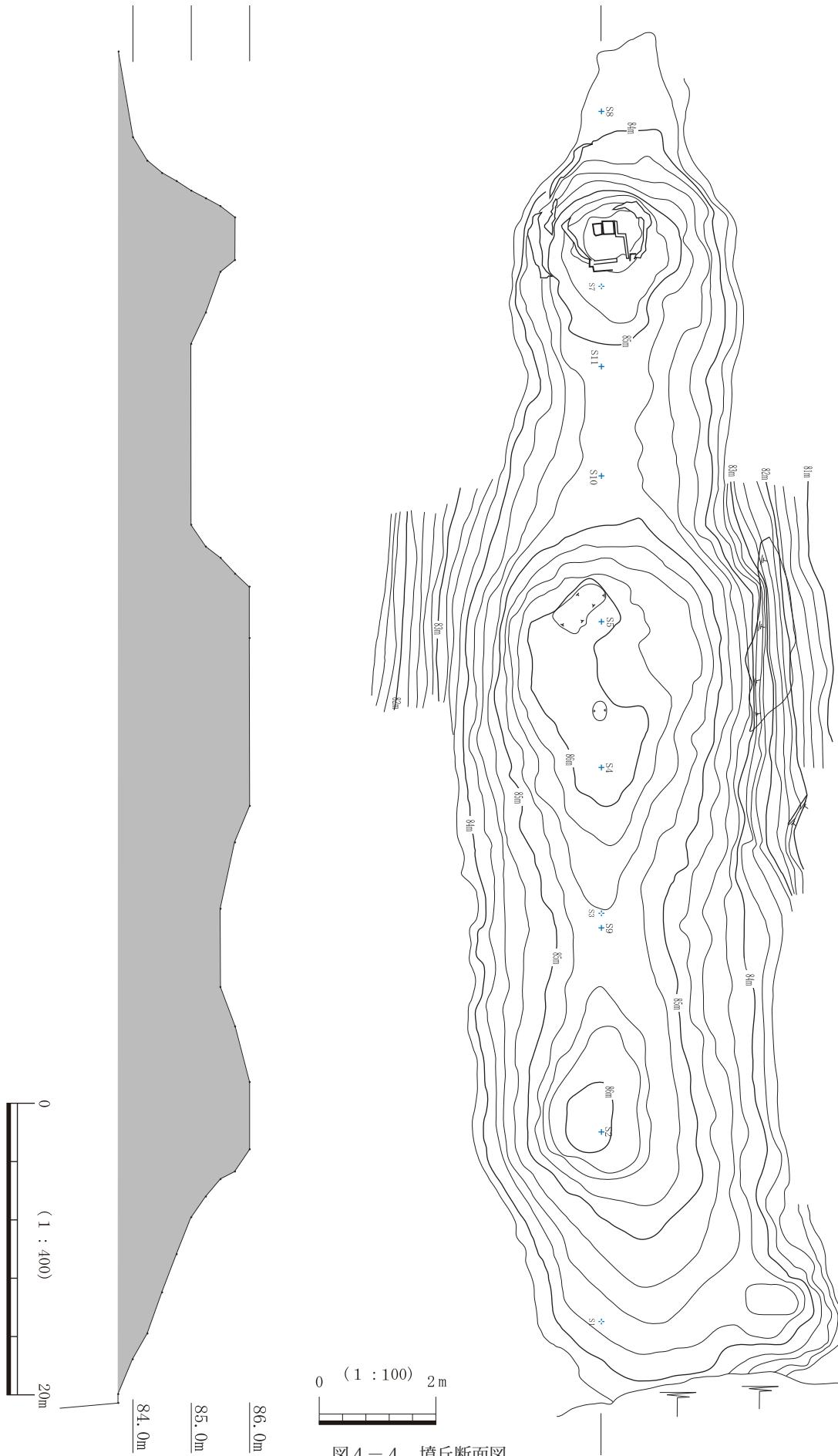


図4-4 墳丘断面図

## 第5章 まとめ

船岡山古墳群の発掘調査は、当初想定していなかった積石と盛土を併用した特異な墳丘構築の確認や多量の埴輪資料の発見、部位ごとに異なる墳端の構築技法や想定外に大きな基盤造成と後世の改変など、調査が進展するごとに新たな課題が浮かび上がり、その度に新たな仮説をたて、発掘調査で検証するという過程を繰り返した。積石塚古墳の発掘調査事例が極めて僅少で、その構造的理解に暗中模索を繰り返し、結果として新事実が明らかになった点も多いが、反面本章にいたっても確定的な見解が提示しえず、課題として積み残した部分も多い。積み残した課題の具体相と、中途まで積み重ねた調査知見を開示することで、将来の調査研究の礎とする。

また、直接的な事業の連続性はないものの、本墳の発掘調査を実施したのちに、高松市教育委員会は徳島文理大学文学部と一部連携・協力し、石清尾山古墳群調査事業として、石清尾山に所在する積石塚古墳の実態解明と史跡追加指定を目指した調査を実施している。積石塚古墳の調査技法の確立にあたり、本墳の調査成果が基礎となり、技法的模索を繰り返している。今後これらの調査成果も順次報告し公開する計画であるが、本書はこうした調査の嚆矢としても位置づけられる。

### 第1節 船岡山1号墳の墳形・墳丘規模

一連の調査により、従来船岡山古墳と呼称されてきた古墳が、1基の前方後円墳（1号墳）と1基の墳形未確認墳（2号墳）の、合計2基の古墳から構成されることが明らかになった。群構成については、図5-1に掲載している。なお、2号墳の規模・墳形については一定の定点を得たものの、確定的な根拠を得ることができていない。詳細は第3章第5節のとおりである。

発掘調査の過程において、特に1号墳の墳形・墳丘規模に焦点を当て、確認を重ねたことから、ここでは主に1号墳の墳形及び墳丘規模について確認しておきたい。発掘調査で確認した、墳端位置及びその傍証となる地山の検出範囲について、やや冗長になるが以下に根拠を列記する。特に後円部側面や前方部側面など、明確な墳端が示せず、二次的な論拠で墳端を想定している箇所については、第3章の報告文を一部抜粋しながら記述する。

後円部北面については、1トレンチにおいて墳端の配石を確認している。

後円部東西側面では、墳端構造そのものは残存していなかったが、盛土の分布と、石垣状の配石を確認した。東面（17トレンチ）では盛土及び配石構造の端部は仮主軸から東12.3mに位置する。また、上段配石の基底は仮主軸から東10.4mに位置する。一方、配石構造が流出した西面（8トレンチ）は盛土端位置で仮主軸西11.5mとなる。

くびれ部では、東西ともに墳端のくびれ部位置を確認した。また、前方部に向かい、墳丘内側に狭くなる前方部形状を確認している。

前方部西側面では、塊石積み（上段）配石列と板石積み（下段）配石列を確認した。上段の配石列は15トレンチで仮主軸西4.5m附近、5トレンチ南壁で4.2m地点を通過する。一方、11acトレンチの上段配石列は、11aトレンチ南壁で仮主軸西5.5mと、5・15トレンチに比べて大きく西にずれる。これを5・15トレンチから復元される上段配石列と整合的に理解するならば、前方部前面配石列の北6.8m、S2から北2.8mの地点において約160°屈折することが想定できる。さらに4、11dトレンチから復元される前面配石列がそのまま西に延伸した場合、S2から南5m、仮主軸から西へ6.5mで上段配石列と前面配石列が60～65°の角度で交わることになる。下段配石列の復元は地山整形痕跡に依存する度合いが強く、それだけ不確定なもの

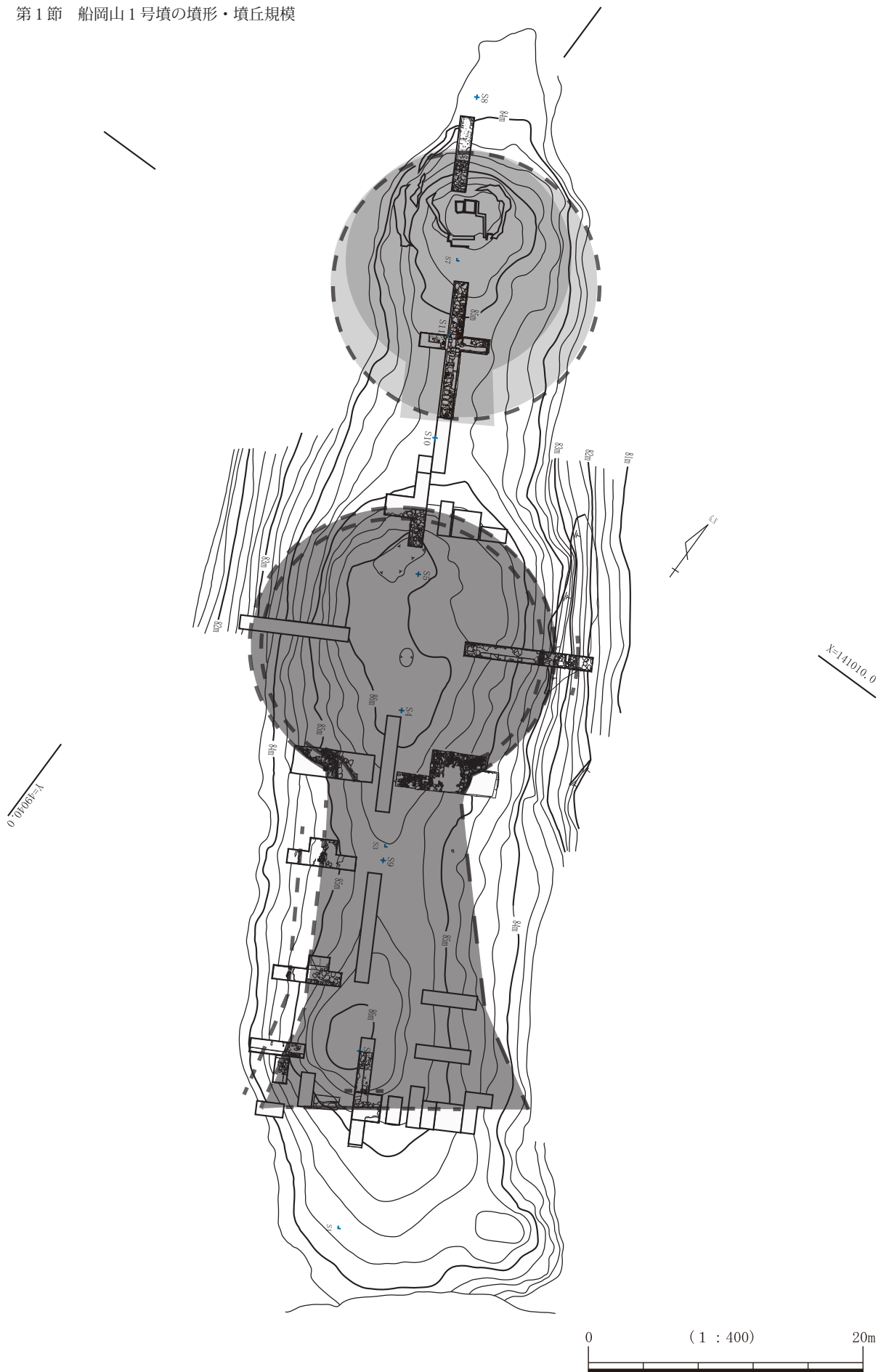


図5-1 船岡山古墳群の群構成

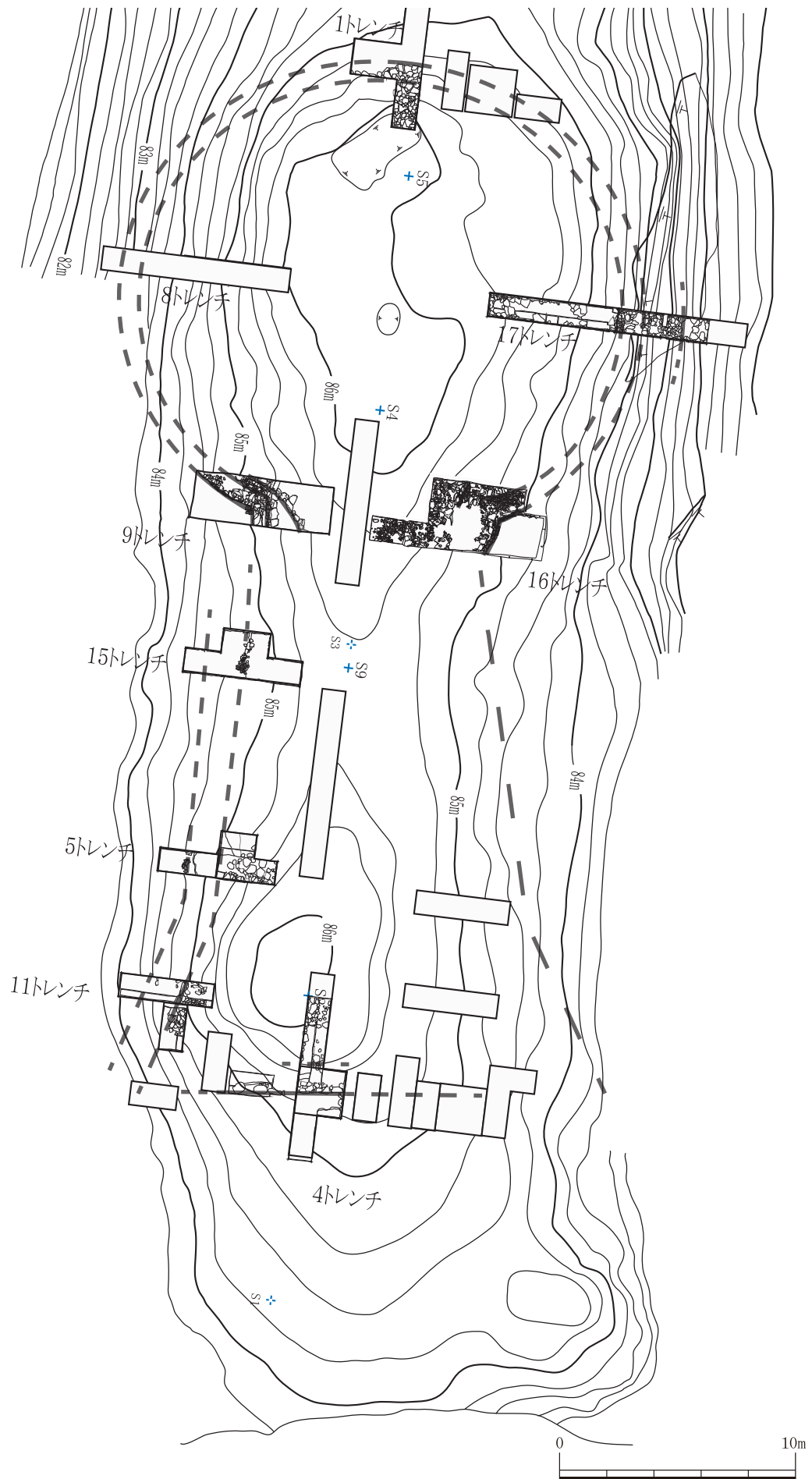


図5-2 船岡山1号墳墳形復元図

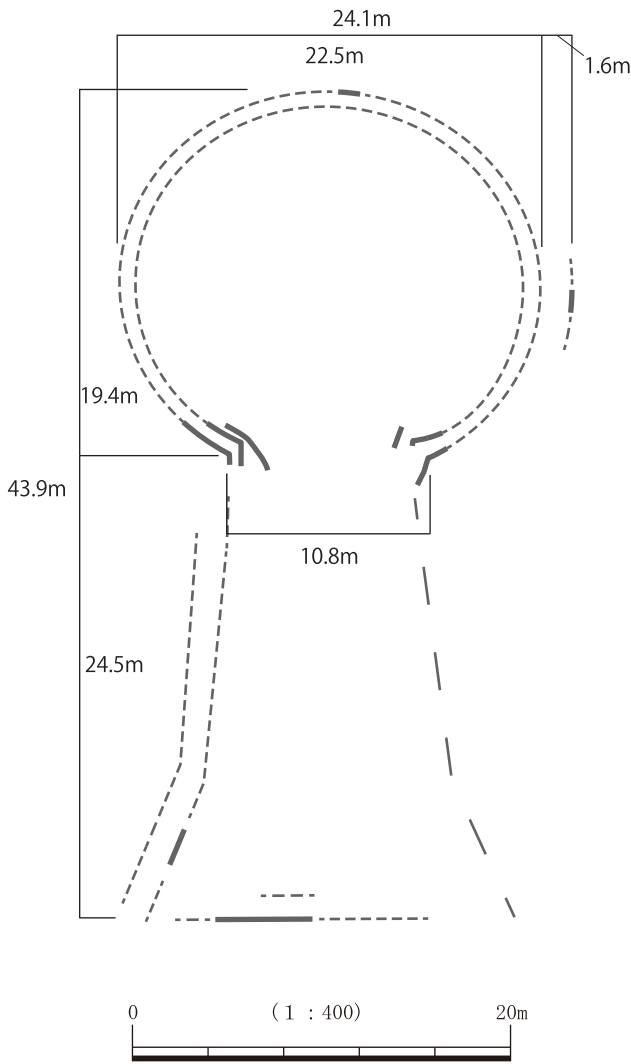


図5-3 船岡山1号墳 墳丘規模模式図

であるが、1.6m～2.2mの間隔、基底レベルでおよそ40～50cmの比高を以て上段配石列の外(下)方を併走することが想定される。

前方部東側面では、明確な墳端位置は確認できていないが、盛土の分布範囲を確認すると、14トレンチで仮主軸の東7mまで、19トレンチでは同9.5mまで風化礫が凝集する盛土層が及ぶことを確認した。

前方部前面では、東西方向に延伸し、仮主軸から8°傾く墳端の配石を確認した。また4トレンチではこの配石列の前面に安山岩板石が折り重なるように落ち込みそこに砂岩小円礫が伴う状態が観察された。塊石積み配石列より上方に、円礫敷面を付設した板石積み配石列が想定され、前方部の前面においては上下二段の配石列を復元できる。

以上の調査所見を元に、図5-2を作成した。前方部前面の配石列及び東西くびれ部の位置を基準に、調査で明らかになった本来の墳丘主軸を縦軸にして作図している。また、図中には墳端位置が確実に押さえられた1・4・9・12・16トレンチと、参考として5・15トレンチの石材を図示している。

### <墳丘規模>

図5-1を元に墳丘規模を確認していきたい。既に何度も確認していることであるが、1号墳が前方後円墳であることは確定的である。後円部北側の墳端位置及び前方部前面端が押さえられるとともに、東西くびれ部の位置が判明することから、後円部径・前方部長を確定することができる。こうした理解に基づくと、船岡山1号墳は、全長43.9m、後円部径は東面17トレンチの上段配石を墳端と理解した場合に東西で22.5m、下段の盛土及び配石の端部を墳端と捉えると、東西幅で24.1mとなる。くびれ部幅は東西で10.8m、前方部長24.5mの前方後円墳である事が判明する。ここまではほぼ確定的な数値と見て良いだろう。

### <墳端の対応関係>

ここでは、上記の墳丘規模を推定するに至った、墳端の対応関係について復元過程を記述する。端的には、検出した墳丘規模確定の定点をどのように結んだのか、という点である。

後円部の復元については、1トレンチと9・16トレンチのくびれ部をそれぞれ定点として、正円を描き、墳端位置に合致する径を探した。その際、17トレンチの上段配石の位置がほぼ正円に合致する位置となったことから、上段配石の位置を墳端として仮定した。また、墳端から一段内側(上段)についても、墳端ラインと相似形で、くびれ部で検出した二段目の位置に合わせて描画した。

この際、1トレンチでも17トレンチでも対応する配石は確認されていないものの、第4章で整理した後円部上の削平により、対応する構造が失われていると仮定すると、整合的に理解が可能である。あるいは、2段目の配石列は墳端と相似形をとらず、全周しない可能性も想定できる。配石列が全周しないという可能性は、墳形復元全体に関わる重要な問題であり、後述する前方部西側面でも確認できることから、一定の留意が必要である。

くびれ部から前方部側にかけては、検出した墳端ラインから、内側にやや入り込む墳形が判明した。ここで問題となるのは、前方部側面のどの墳端位置と対応するのか、という点である。前方部西側面では上下2段の配石列が確認されているが、平面図上で見ると、くびれ部の墳端ラインを延長した際、下段の配石列とつなぐには西側に大きくズレが生じ、その先の前方部前端に続くラインを設定しがたい。平面位置としては上段の配石列に連続すると理解するのが妥当であると考え、図示した。ただし、こうした想定を行うと、下段の配石がくびれ部には連続せず、前方部側面のいずれかの地点で終息することとなる。一方、後述する前方部前端との連続において、墳端の配石と連続すると考えられるが、前方部では墳端ラインよりも内側に板石積みの墳端ラインが存在することを推定している。こうした推定が妥当であった場合に、これに対応する前方部側面の墳端ラインは未確認であることとなる。

前方部西側面南側の屈曲については、5・12トレンチで確認した配石列の平面延伸方向から、前端に向かって強く屈曲し、撥形に開く形状を復元した。

一方、前方部東側面は、墳形復元の定点に乏しいことから、西面の墳端ラインを反転し、東側くびれ部と合致する地点まで並行移動した。確認した盛土端部よりも大きく東側へ移動する結果となったが、第3章でも既述のように、くびれ部以南に広い未調査地が広がっている。くびれ部から内側に延伸した墳端ラインが、どの地点で外方に屈曲するかという屈曲点の位置によって、東側面の位置は大きく変わり、前方部の形状理解が大きく変わるが、これを確定するための定点を今回の調査では確定することが出来なかった。このため、本図に示した該当部分については、今後の調査で修正されるべき状況であることを明記しておきたい。

前方部側面と前方部前面の連続については、12トレンチで当初期待した前方部前端の西端部分が流出していると判断されたことから、前端ラインと側面ラインの延長線の交差点を端部とした。

以上をまとめると、墳形復元にあたっての墳端ラインの対応関係の推定は、いずれの地点でも大きな課題を内包していることが分かる。特にくびれ部と前方部の状況及び後円部側面の状況は、墳形が単純な一筆書きで表される前方後円形と、その大小相似形を垂直方向に重ねた形状として設計されたのではない可能性を示唆する。検出した定点が少ないこと、削平と流出が著しいことも要因のひとつであるが、もう一方で、墳形の理解を困難にしているのは、検出した墳端の検出レベルが、同一ライン上にあると判断される場合でも大きく異なる点である。これは、痩せ尾根の頂部に前方後円墳の平面形を設計するにあたり、本来の地形の起伏に沿わせて形状を変更したのではなく、地形的な制約を意図的に克服する試みを行い、墳丘を築造したためであると考えられる。

墳形、特に墳丘平面形の評価については、主に前方部形状の分類を主たる材料として検討されているが、今回の調査では特に前方部東側面の形状・位置が未確定であることから、性急な評価は困難であると考えている。確実な定点として、前方部の最狭部位置がくびれ部よりやや前方部前側面にある点、前方部側面が撥形に開く点などは、当地域の前期古墳でも、古相を示す古墳と共通性の高い墳形であることは確認できる。古墳の築造時期の詳細は、遺物編にて総論することとしたい。

### <地形と墳丘構築>

後円部で墳端ラインとして同一に接続した3地点の基底高さについて、1トレンチで84.9m、9トレンチで84.4m、16トレンチで84.0mと、実に1m近くの比高差が確認できる。一方、参考とした17トレンチの上段配石は83.0mと、さらに大きな比高差があり、まったく水平を指向しているとは評価しがたい。なお、17トレンチの下段配石はさらに下方にあるため、こちらに墳端ラインが対応した場合の比高差はさらに大きくなることになる。

続いて、くびれ部と前方部であるが、9トレンチでは1段目の前方部側の基底面標高は84.2mを測る。これに連続すると考えている前方部西側面の上段配石は15トレンチで84.5mとなり、さらに前方部前端に向かって5トレンチ・11acトレンチでともに85.0mを測る。くびれ部から前方部前面にかけて、緩やかに上昇する傾向にあると捉えられる。

前方部前端(84.9m)と西側面(85.0m)でも、ほぼ同一の標高であり、連続するものと捉えるのに違和感はない。

東側面については標高を比較できる確定的な定点が無いことから、ここでは触れないこととする。

一方で、後円部北端(84.9m)と前方部前端(84.9m)の標高はほぼ等しい数値となる。このことについては、尾根の稜線に沿って墳丘主軸を設定しており、もともと標高差の無い地形上に墳丘を築造したことによる、偶然の結果とみなすことも可能であるが、やはり標高が極めて近似しているという点と、地山面の整形及び盛土の施工が確認できるという点からも、ある程度基盤を整えたうえで墳丘築造を行った可能性も十分想定できる。

このように、墳丘主軸付近、言い換えると、尾根の稜線上では基底部の標高が極めて近似しているものの、尾根の稜線から離れる側面部に近づくにつれ、基底の高低差が大きいことを確認した。17トレンチで確認できたように、後円部側面ではかなり下部まで盛土、石垣状配石の構築がなされるなど、基礎部分に対しても入念な施工がなされているし、前方部西側面では盛土・積石を多用して撥形に開く前方部側面の拡幅を試みたと考えられるなど、地形の克服に大きな労力を投下していることが読み取れる。このように、幅の狭い痩せ尾根上に墳丘を構築するに当たって、かなりの労力投下が読み取れるものの、それでも完全には地形の起伏を克服しきらず、一定程度は地形に沿った形での墳丘構築がなされたこともまた事実である。すなわち、完全に平坦なプラットフォームを構築して、その上に墳丘を築いたのではなく、ある程度古墳築造に際しての基盤造成のような行為が行われているものの、完全な水平面は指向していないということである。くびれ部の16トレンチで顕著に確認されたが、傾斜した地形に沿った配石列は、墳端のみではなく、より上段の配石列も併行して同程度傾斜したまま構築される。墳端の配石は、少なくともくびれ部では塊石列の前面に板石の垂直壁を施工しているが、この墳端構造は、空積みで後ろに控えを持たないため、前方及び下方に向かって転落しやすいという構造上の特徴を持つ。平面形を優先した配石の構築は、必然的に下方に向かって降る斜面上に板石積みを配することとなるため、崩落の危険性は増している。にもかかわらずの平面形状であるということは、すなわち墳丘の平面形を整えることが墳丘築造にあたり優先的に配慮されたことを意味するのであろう。

## 第2節 船岡山1号墳の墳丘構造

### 第1項 墳丘「芯」の構築

一連の調査で、古墳築造にあたり、地盤の削平から盛土、積石の施工などの工程が明らかとなっ

た。本節では、1号墳の墳丘構築の順に沿って、各工程の詳細を再確認していきたい。

まず、地山である風化礫岩盤の加工が確認できた。確認したのは、後円部側で1・8・17トレンチ、くびれ部の9・16トレンチ、前方部の4トレンチである。墳丘構築にあたり広い範囲で確認できる事から、墳丘築造前の広範な造作と捉えられる。いずれも、風化礫の表面を削り、平坦な面を作り出している。このため、表面の風化層が確認できず、堅緻な岩盤層が露出することとなる。また、墳端に相当する部分では、墳端の配石の背面構造として、一部階段状に段を削り出した可能性が想定できる箇所もある。平坦面と垂直面からなる段の上面ないし前面に石材を配置する、あるいは盛土を施工するといった墳丘構築の次段階の作業がなされることから、墳丘構築の最初段階でなされた行為であるといえる。なお、ブラックバンドは堆積層として確認することは無かったが、後述する盛土中に比較的多量の炭細片が混じり、やや暗灰色を呈すものが認められた。盛土は風化礫の表面をはつり取ることで供給されたものと考えているため、古墳築造の最初段階に山頂に火入れを行った可能性は十分想定できる。

続いて、盛土を用いて墳丘の立体形状の大略が造成される。地山加工面の直上に施工され、後述する積石よりも下位に位置する盛土を下層盛土と呼称する。積石の上位に再度施工される盛土を上層盛土と呼称し、こちらは後述する。下層盛土は、地山表面の風化層を起源とすると考えられ、灰白～黄褐色系統の淡いシルト層を主体とする。地山礫の角礫や炭片、あるいは石鱗片や弥生土器片等の包含が確認され、先行する土地利用の痕跡を削平して形成されたことが伺える。5～10cm程度を一単位とし、複数枚を水平方向に折り重ねるように施工されており、非常に固く締まる。調査の中盤までは、このために盛土を地山として誤認した箇所が多くあった。下層盛土の施工について、盛土上面の標高を比較すると、1トレンチでは84.5m、4トレンチでは標高85.4mとなり、点的な比較であるが、仮主軸上の南北では、前方部側が盛土上面の標高が高いことになる。一方、後円部の東西側面では、盛土がかなり斜面下方まで確認できる。8トレンチでは、検出した盛土の標高は82.2mまで下っている。17トレンチでは、さらに下降して81.6mまで盛土が確認されている。後円部東西側面では、斜面のかなり下方まで、地山の削りだしと、その前面の盛土、配石の成形という施工単位が認められる。こうした造作が後円部のどの範囲まで周回するかについて確認はできていないが、いずれにせよ、下層盛土には積石の基盤となる墳丘上面付近の盛土と、墳丘斜面の拡張の両者が確認できる。前方部西側面の12トレンチでも、盛土を施工して前方部前端を撥形に強く拡張した痕跡が確認されていることから、前方部側においても側面拡張のための下層盛土が確認できる。

墳丘上部においては、この盛土上に積石が確認できる。積石を構成するのは、地山礫の角礫を主体とし、砂岩円礫や安山岩板石を少量含む礫群である。部位によって法量のばらつきや、風化の程度に差異があり、二次的な破碎の可能性もあるものの、全体を概観すると5cm程度の小型礫から、径30cmを超える大型の石材も用いられる。こうした積石の上部は、第4章で確認したように既に削平が広く及んでいると考えられ、特に後円部上は大規模に削平された可能性が考えられる。後円部北側の1トレンチ～18トレンチでは、積石の厚さ90cmを測り、非常に重厚な積石が確認できる。一方16トレンチでは30cm程度の積石層を検出したのみであり、後円部に比して薄い積石であった可能性が想定される。また、前方部では、4・11トレンチ等の断割り調査の結果、後円部とは異なり、明確な積石が確認できず、土石が混濁した盛土層と見なすのが適当な、地山礫と地山起源の盛土の交雑が配石列の背面まで続くことを確認した。



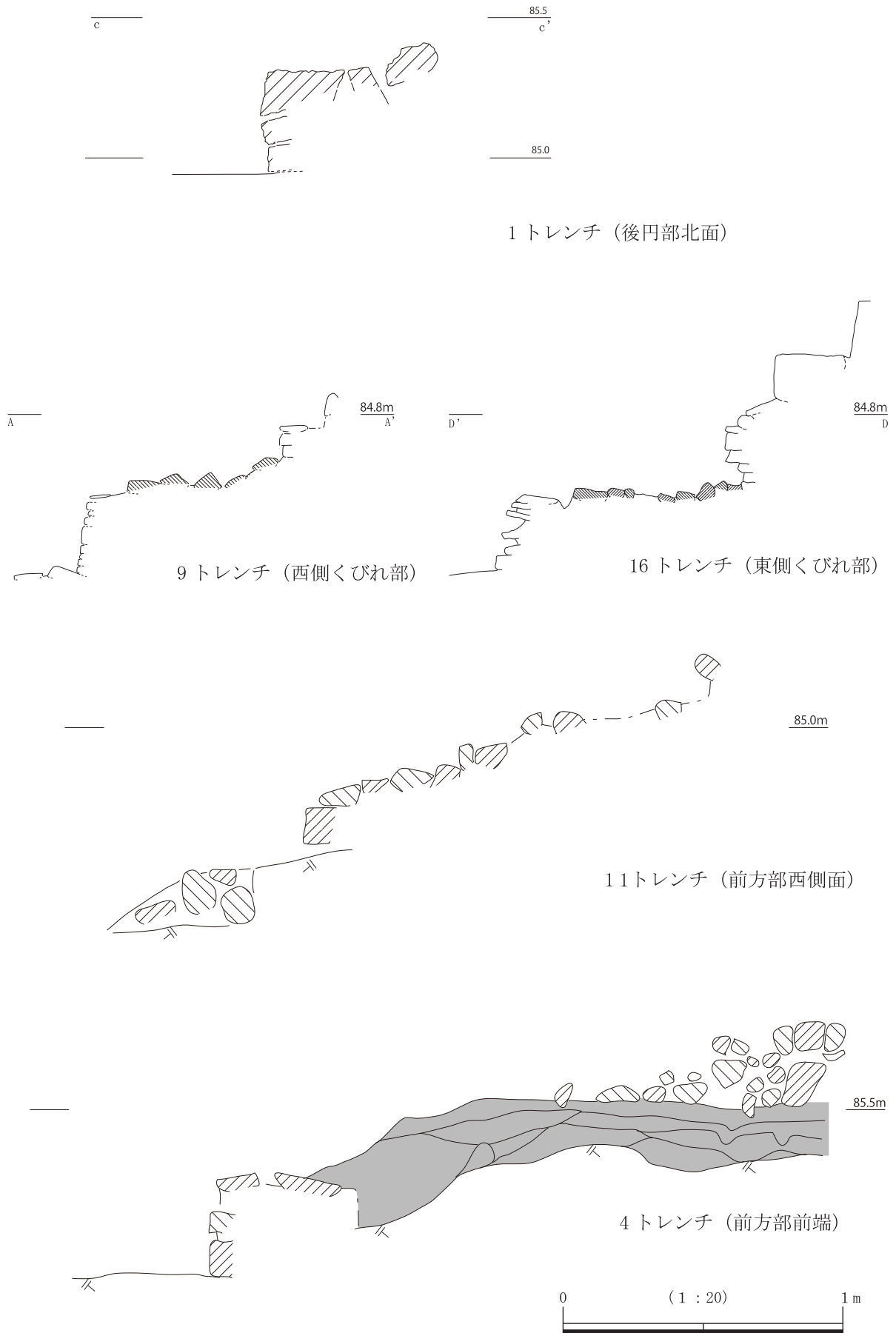


図5-4 船岡山1号墳 各地点の墳端構造

このように見ると、積石は後円部で非常に重厚で、くびれ部付近でその施工厚を減じ、前方部側では明確な積石は確認できなくなる、という傾向がうかがえる。積石の施工は、後円部に選択的に行われた施工方法であると考えられ、後円部と前方部の「芯」の構造が意図的に区分されていた可能性を想起させる。

続いて、墳丘上部では、積石を被覆するように施工された盛土が認められる。これを上層盛土と呼称する。上層盛土は、下層盛土と類似した、淡灰白～淡褐色系のシルト層を主体とする。下層盛土ほどではないが、比較的固く締まる。この上層盛土が確認できたトレンチは、くびれ部から前方部側に限られるが、後円部上は大規模に削平を受けていると考えられることから、旧状の分布範囲を示すものとは解釈しがたい。また、現在上層盛土と呼称している堆積層が、盛土起源の二次的な堆積層である可能性もまた否定しきれない。調査した範囲では、この上層盛土は厚さ10cm以下で、積石を被覆したのちに、上層盛土で墳丘の上部が高く築かれたとは考えがたい。また、被覆の程度も、墳丘前面を覆うものか、局所的なものかについては判断を留保せざるを得ない。ただし、後述する墳端部分では、配石の側面を被覆する上層盛土は認められないことから、少なくとも側面形としては、配石の石材が露出していたことは間違いない。

このように、墳丘の芯については、基本的には下部から地山加工・下部盛土・積石・(上層盛土)という構造を確認した。続いて、墳丘外表の構造について確認しておきたい。

## 第2項 墳丘外表の構築

今回の調査で、多くのトレンチで確認し、その多様さに圧倒されたのがこの外表構造である。検出した部位によって、あるいはその後の削平の程度によって非常に多様な外表構造を検出することとなった。各部の詳細は第3章に詳しいため、ここでは概略を確認しておきたい。

後円部では、1トレンチで地山礫塊石及び大型の砂岩円礫を円弧状に配置する構造を確認した。くびれ部で見られた安山岩板石の垂直壁は確認されておらず、崩落した状況も確認できないことから、本来存在していなかった可能性が高い。

くびれ部では、東西両側で地山礫塊石の前面に安山岩板石垂直壁を伴う構造を確認した。確実に1・2段目までで、東側については3段目も同一の構造の可能性が高い。地山礫塊石は、下方は地山の削り出し、上方は下層盛土によって整形された段の上部ないし前面に設置される。このため、(地山削り出し+盛り土)、地山礫塊石、板石垂直壁という断面3層構造の非常に重厚な外表構造であると評価できる。

前方部が最も外表構造のバリエーションに富む。前方部前端では、地山礫塊石を直線状に配置し、一部石垣状に2段以上積み上げた状況が確認できる。一方、安山岩板石の垂直壁は確認できていないものの、転落石の状況から、塊石の前面ではなく、上部に板石積みが存在した可能性が想定される。くびれ部とも後円部北端とも異なる構造であるといえる。西側面では上段が塊石からなる配石列、下段が痕跡からの推測であるが、安山岩板石積みのみからなる配石列であると推測される。

なお、外表の石材と背面の盛土・積石との関係であるが、配石は遺構の保存のため、基本的に断割りを行っていない。このため、攪乱断面や隙間からの観察所見を提示できるのみであるが、地山礫塊石と盛土は、互いに密着するケースが多い。ただし、塊石の上面を盛土が被覆することはなく、塊石の背面及び下面に隙間無く盛土が接する状況を確認したのみである。このため、外表構造を構築するにあたっては、盛土で被覆するといった意図は読み取ることができない。また、安山岩板石垂直壁の目地材として、盛土が施工された箇所も確認されず、基本的には空積みで盛土の粘着力を

期待した構造ではない。さらに、安山岩板石垂直壁と背面の塊石との間にも裏込め状の造作は確認できない。安山岩板石の垂直壁は、長辺を横手方向に向け、千鳥配置上に積み重ねたもので、石材相互の摩擦力で自立し、ほぼ垂直な面を構築している。背面の塊石に重心を持たせかける意図は非常に希薄で、また背面方向に向かって石材の長軸を差し込む用材も確認できない。背面の安定的な構造に一部抛りながらも、自立性の高い垂直な壁体であると言える。

#### <類例との比較>

続いて、調査で確認した墳丘構造について、類例との比較による若干の評価を試みたい。

墳丘外表の構造は、墳丘が完成した際の外見に直結する項目である。ここで重要なのは、上層盛土が墳丘上面でのみ部分的に確認されており、墳丘側面は全周で石材が露出していたことである。墳丘上面の平坦部に盛土が広がっていた可能性は否定できないが、少なくとも墳丘を側面から、あるいは山裾から、遠隔地から見上げた際には、視覚的に確認できるのは配石のみである。つまり、積石塚古墳の墳丘と同一の外観を呈していたことになる。以下では、近年発掘調査で墳丘外表の構造が明らかになっている石清尾山古墳群の積石塚古墳（高松市教委 2014～2016）との比較を行いたい（図5-5）。

稲荷山北端1号墳は、双方中円墳であることを新規に確認した事例であるが、くびれ部で低い安山岩板石垂直壁と塊石列が、同一墳端ラインを構成している状況を確認した。同一ラインで部位により用材が異なるという状況であるが、くびれ部に近いほうでは安山岩板石の使用程度が上昇する状況である。船岡山1号墳では、安山岩板石と地山礫塊石が、内外に重層的に用いられており、明確な工程差として使い分けられていたが、ここではそれが同一工程で混在していることとなる。遺物がほぼ出土しておらず、本来的に土器・埴輪を伴わない可能性が高いと考えているが、低平な方丘部の形状から、墳丘側面形状を基準にした編年観に照らす（大久保 2006）と、船岡山1号墳よりも古相を示すと評価できる。

一方、鶴尾神社4号墳では、くびれ部付近において、安山岩板石の垂直壁を確認しており、前方部前端の塊石を積み上げた端部の構造等、船岡山1号墳と共通する点も確認できる。ただし、基本的には前端の配石は1段で構成されており、船岡山1号墳は2段以上の石垣状の積み上げが認められる点から、立体感において船岡山1号墳とはやや異なる形状を呈す。

稲荷山姫塚古墳では、外表の構造として、船岡山1号墳と酷似する構造を確認している。すなわち、最外表の安山岩板石の垂直壁・背面に地山礫（石清尾山の場合、安山岩角礫）という構造である。相違点としては、稲荷山姫塚古墳では前方部前端を除く全ての調査区で、安山岩板石の垂直壁が巡る事を確認した点である。非常に多量の安山岩板石を用いて、全周に近い範囲に施工したことが伺える。出土した埴輪には、船岡山型埴輪（大久保 2013）と考えられる器種も含まれており、形態も類似していること、墳端構造も共通することから、ほぼ同時期の築造が想定できると考えている。

こうした事例から、船岡山1号墳の外表について、用材及び使用礫種まで含めて、石清尾山古墳群の積石塚古墳、中でも前期前半に位置づけられる事例と非常に近似したあり方であると評価できる。船岡山1号墳で用いられた安山岩板石は、現地で産出しない石材であることから、その搬出元として、石清尾山塊は有力な候補地たりえるであろう。また、墳丘構築に際して、石清尾山姫塚古墳、石船塚古墳など、定型化した円筒埴輪や刳抜式石棺を伴う前期後半を呈す古墳には、未調査であるものの、現在のところ安山岩板石の垂直壁は認められない。船岡山1号墳等で確認された安山

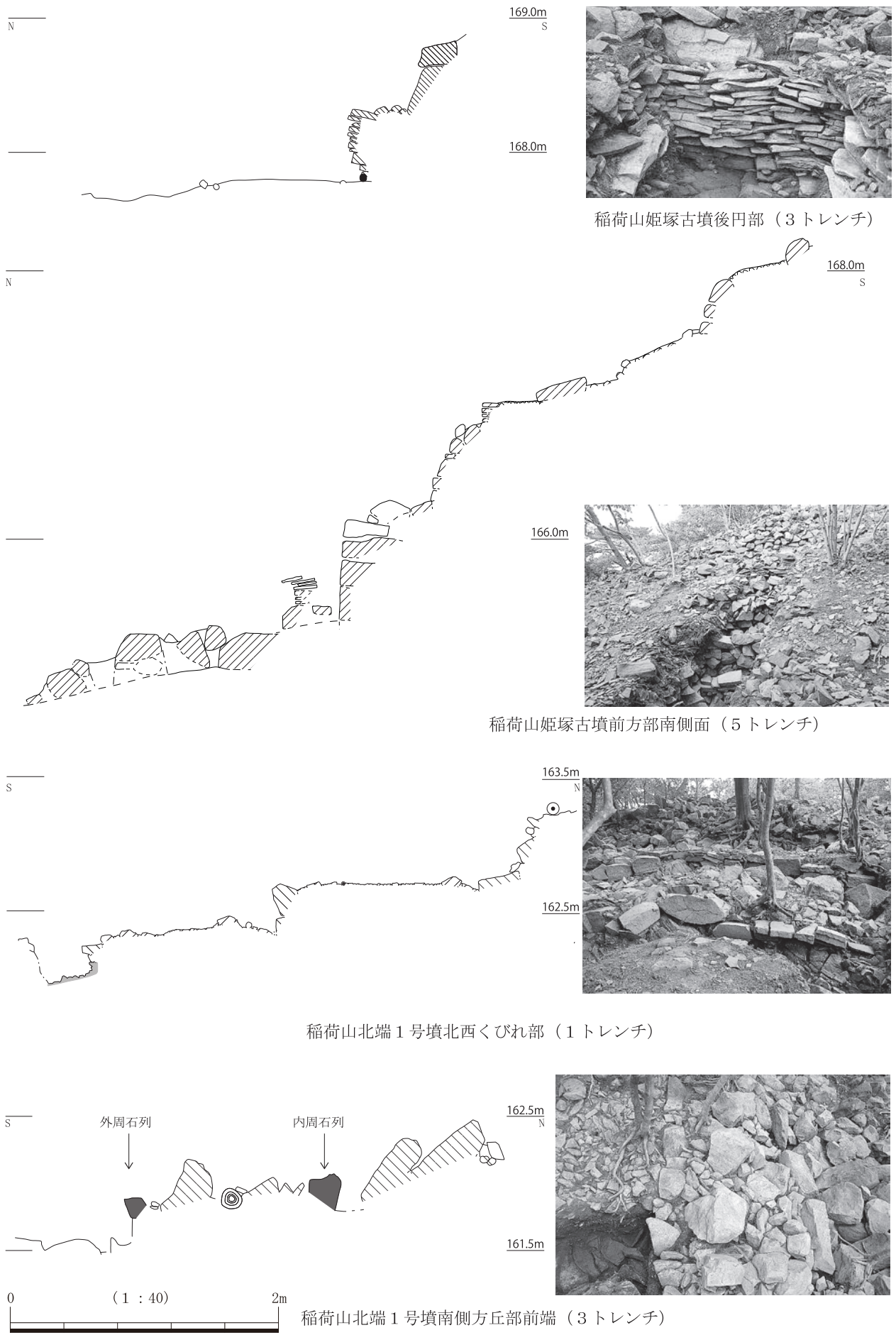


図5-5 石清尾山古墳群の墳端構造

岩板石垂直壁が構造的に消失し、内面の塊石が露出した状況であると評価することも可能であろう。こうした構造の差は積石塚古墳の墳丘外表の時期的な変化を表している可能性が高い。本稿ではこれ以上追求しきれないが、今後の整理課題として挙げたい。

続いて、墳丘「芯」の構造について比較を行いたい。石清尾山古墳群の猫塚古墳では、中円部上の大規模な盗掘坑によって、墳丘表面から基底部まで、全て積石で構成されていることが判明する。石清尾山に展開する積石塚古墳の構築方法を確認する上で非常に重要な知見であるが、これと比した場合、船岡山1号墳の築造に際しては、多量の盛土を併用している点が差異として抽出できる。外見上は同一の積石塚古墳に見えるが、その芯の構築技法には差異が見出せるのである。この事象の背景には、一つに船岡山1号墳の地形的な環境が想定できる。石清尾山は、固い安山岩のキャップロックが覆い、風化の進行が遅いことから地表面から土砂を供給することが困難な地形であることが積石塚古墳構築の背景の一つであるとして古くから指摘される（京都帝国大1933）。このため、環境的な要因として、墳丘構築材を周辺から獲得する際には、必然的に礫が集積されることとなる。一方、船岡山には同質のキャップロックが認められず、風化の進行した岩盤が露出している。これを供給源とした場合には、全てを積石で構築するのは不合理であるだろう。このため、墳丘構築材に現地供給の風化土が用いられることとなる。

こうした地理的環境の理解を素地に、改めて船岡山1号墳の墳丘構造の評価を試みると、墳丘完成時の視覚的な積石塚古墳への強い指向性が窺える一方で、視覚的に顕在化しない、墳丘芯の部分については、柔軟に現地調達材で施工している状況であると評価できる。反面、後円部側面下方の石垣状配石や前方部前面付近の撥形に開く側面部を構築するための背面盛土など、地形的な制約を克服するために多大な労力を投下し、平面形を確保したことも強調される。安山岩板石を崩落しやすすい斜面部にも関わらず垂直積みしている点も、合理性では無い選択原理による意図的な工法選択として捉えることができるであろう。あえて単純化すると、本来積石塚古墳の構築には不合理な地理的環境にあるにもかかわらず、また、大規模な円丘と撥形に開く前方部を構築するには狭過ぎる尾根の上であるにもかかわらず、多大な労力を投下してまでも、外見上は積石塚古墳とそっくりで、設計意図の明確な墳丘を作り出している点に、当墳の築造意図が如実に投影されていると見ることができると考える。墳形について前方部形状が今回は明らかにしえなかったが、少なくとも、墳丘の外表に関しては積石塚古墳と強い一体性を演出することを強く意図されたのであろう。遺物編にて詳述する「船岡山型埴輪」（大久保2013）が石清尾山古墳群中の稲荷山姫塚古墳でも確認されている点も、類似した背景を持つだろう。ただし、同型の埴輪は、鍬形石や大形の鉄鍬などを副葬され、墳丘を盛土で構築する高松市茶臼山古墳でも確認されており、同一平野内のほぼ同時期の古墳間のあり方も全て一体的な訳ではない。墳丘外表の構造は、古墳築造にあたって、重要ではあるが検証する対象の一つの属性として過大評価しすぎず、他の属性とあわせて相対化する必要があるだろう。（高上）

<参考文献>

大久保徹也 2006「猫塚古墳の編年の位置について」『田村久雄先生傘寿記念文集 十瓶山Ⅱ』

大久保徹也 2013「津田湾・津田川流域に所在する前半期主要古墳の編年の整理」『津田古墳群調査報告書』さぬき市教育委員会  
京都帝国大学 1933『讃岐高松石清尾山石塚の研究』

高松市教委 2014「稲荷山姫塚古墳」『高松市内遺跡発掘調査概報—平成25年度国庫補助事業』

高松市教委 2015「稲荷山姫塚古墳」『高松市内遺跡発掘調査概報—平成26年度国庫補助事業』

高松市教委 2016「稲荷山北端1号墳」『高松市内遺跡発掘調査概報—平成27年度国庫補助事業』



船岡山遠景（南東から）（山頂が古墳所在地）



船岡山1号墳 墳丘遠景（北から 手前が3次調査1トレンチ）



船岡山2号墳 墳丘遠景（1号墳から 中央が3次調査7トレンチ）



船岡山1・2号墳 墳丘遠景（北から 手前が3次調査6トレンチ）



船岡山1号墳 後円部北側 1・18トレンチ完掘状況（8次調査時）



1・18トレンチ 後円部北面の配石と墳丘積石（北から）





3次調査1トレンチ完掘状況（手前が北）



18トレンチ完掘状況（東から）



3次調査1トレンチ北面配石完掘状況（北東から）



1・18トレンチ北面配石と墳丘積石（西上方から）



2 トレンチ完掘状況（北から）



3 トレンチ完掘状況（北から）



2・16 トレンチ墳頂の積石（南西から）



3 トレンチ北部断面（西から）



4・12c トレンチ (再調査) (南から) (6次)



4 トレンチ西壁 前方部の墳丘盛土断面 (南東から) (6次)



5トレンチ完掘状況（西から）（2次）



5トレンチ配石構造（南西から）（2次）



5トレンチ拡張区完掘状況（西から）（7次）



5トレンチ拡張区 上部配石と下部盛土（西から）（7次）



船岡山2号墳 6トレンチ完掘状況（北から）



6トレンチ 墳丘の積石拡大



6トレンチ墳丘の積石（北東から）



7トレンチ完掘状況（北から）



7トレンチ南拡張区完掘状況（南から）



7トレンチ中央敷石面下部の盛土層（北西から）



7トレンチ東拡張区敷石面下部の盛土層（北から）



7トレンチ西拡張区 敷石面下部の盛土層（北から）



7トレンチ（北端）の敷石面連続部分（東から）



7トレンチ東拡張区の敷石面下部盛土層と  
地山面（北東から）





8トレンチ完掘状況（西から）（3次）



8トレンチ拡張区 完掘状況（東から）（9次）



8トレンチ拡張区東部 盛土断面（北から）



9トレンチ完掘状況（南から）



9トレンチ完掘状況（西から）



9トレンチ 外表の配石（西から）



9トレンチ1段目 くびれ部拡大（西から）



11トレンチ 完掘状況（北西から）



11トレンチ 配石列検出状況（北から）



11トレンチ 配石列検出状況（西から）



11トレンチ 盛土断割状況（西から）



11a・c トレンチ 前方部西面配石列と背後の墳丘積石（西から）



11d トレンチ 前方部前面配石列



11a トレンチ前方部南壁東部断面墳丘盛土と積石



11b トレンチ断割の墳丘盛土層（南から）



11a トレンチ前方部西面配石列の据置面（北西から）



12トレンチ 完掘状況（西から）



19トレンチ 完掘状況（東から）



13トレンチ 完掘状況（東から）



14トレンチ 完掘状況（北西から）



15トレンチ 完掘状況（東から）



15トレンチ 石材集中検出状況（西から）



15トレンチ 地山削出段と石材集中検出状況（西から）



16 トレンチ配石確認状況（東から）



16 トレンチ配石確認状況（南から）





16トレンチ完掘状況（東から）



16トレンチ 配石拡大（南から）



16トレンチ 2段目くびれ部の石積状況



16トレンチ 1段目付近 埴輪集中検出状況（東から）



16トレンチ 南壁断面（北東から）



16トレンチ 南壁 墳丘盛土断断面（北東から）



17トレンチ 上下の墳丘斜面配石（東から）（9次）



17トレンチ 上下の墳丘斜面配石（北東から）（9次）



17トレンチ 上段配石の細部（西から）



17 トレンチ上部の攪乱再堆積層と下部の墳丘盛土積石残部（東から）



17 トレンチ南壁西端断面



17 トレンチ南壁中央断面



17 トレンチ南壁東部断面



17 トレンチ墳丘盛土・積石残部検出状況（東から）



17 トレンチ東端の配石末端（北から）

# 報告書抄録

ふりがな	ふなおかやまこふんぐん(いこうへん)							
書名	船岡山古墳群(遺構編)							
副書名	高松市教育委員会・徳島文理大学文学部連携協定調査報告書							
巻次	第1冊							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第181集							
編著者名	大久保 徹也(徳島文理大学文学部) 高上 拓(高松市)							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦 2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯 。 / 〃	東経 。 / 〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふなおかやまこふんぐん 船岡山古墳群	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 かがわちよ 香川町	37201		34° 16' 11"	134° 1' 59"	2008. 7 . 22 ~ 2012 . 11. 14	161 m <sup>2</sup>	重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
ふなおかやまこふんぐん 船岡山古墳群	古墳	古墳時代前 期前半  中世	1号墳 (前方後円墳) 2号墳 (墳形未確定)	埴輪  土師器・越州窯系青磁・釘		盛土と積石を併用 した墳丘構築。表面 は積石塚古墳と 類似。 特異な円筒形埴輪		
要 約	<p>高松平野南部に所在する前期古墳の墳形確認調査。高松市教委と徳島文理大学文学部が連携協定を結び、重要遺跡の確認調査として実施した。</p> <p>調査開始時は近在の浅野小学校石棺(凝灰岩製刳貫式石棺)の帰属古墳と目されていたことから、前期末の時期が想定されていたが、調査の結果、前期前半に属することが判明した。また、墳形についても当初双方中円墳が想定されていたが、前方後円墳1基と墳形不明墳1基の、2基からなることが判明。さらに、墳丘構築に際しては、墳丘芯に近い工程では盛土・詰め石を多用し、墳丘表面は石清尾山古墳群の積石塚古墳と酷似した石積みで構築しており、視覚的に積石塚古墳と同様の仕上がりとなっている。本書では、こうした墳形や墳丘構築についてまとめ、次年度刊行予定の別冊で遺物について報告する。</p>							

高松市埋蔵文化財調査報告第181集  
高松市教育委員会・徳島文理大学文学部連携協定調査報告書  
第1冊

## 船岡山古墳群(遺構編)

2017年3月31日

編 集 高松市教育委員会・徳島文理大学文学部  
高松市番町一丁目8番15号  
発 行 高松市・高松市教育委員会  
印 刷 有限会社 中央ファイリング